

第 44 回婦人週間全国会議録

性にとらわれず いきいきと暮らせる時代を築こう



ひと ひと
女と男

個性で描く未来形

労働省婦人局

は　　じ　　め　　に

労働省では、我が国の女性が初めて参政権を行使した４月１０日を記念し、この日に始まる１週間を「婦人週間」と定め、昭和２４年以来、婦人の地位向上のための啓発活動を全国的に展開しています。

近年、婦人の地位向上のための法律や制度の基本的な枠組みは整備されましたが、それらを社会に定着させ、実際上の婦人の地位を向上させていくことが必要です。

第４４回を迎えた平成４年度は、女性、男性を問わず、各個人があらゆる分野で個性を発揮しながらいきいきと暮らすことのできる社会の実現に向けて努力していくことを目標に「性にとらわれず　いきいきと暮らせる時代を築こう」をテーマとして「第４４回婦人週間全国会議」を開催し、全国から約９００人の参加がありました。

ここに、会議の記録をまとめ、関心のある方々の参考に供しますので、御活用いただければ幸いです。

最後に、多大な御協力をいただきました講師の先生方に深く感謝の意を表します。

平成４年１１月

労働省婦人局

目 次

I	第44回婦人週間全国会議の概要	1
II	開会あいさつ	3
III	祝 辞	4
IV	第36回国連婦人の地位委員会報告	8
V	フォーラム『個性で描く未来形』	15
	基 調 講 演	17
	体験発表およびディスカッション	32
VI	閉会あいさつ	62

I 第44回婦人週間全国会議の概要

- 1 趣 旨 国際婦人年（1975年）以降、婦人の地位向上のための法律や制度の整備が行われ、制度上の平等はかなり達成されたが、その後の事実上の平等の達成が大きな課題となっており、実際に婦人の地位を向上させていくためには、男女が性にとらわれずいきいきと暮らすことができる社会を創造するよう努力する必要がある。
このため、個人あるいは団体等が性別を問わず個性を発揮し、社会のあらゆる面でのびやかに暮らすことのできる社会の実現のための諸活動の情報や成果を交換し、今後の活動に資することを目的として、「第44回婦人週間全国会議」を開催する。
- 2 主 催 労 働 省
- 3 協 賛 財団法人 婦人少年協会
- 4 後 援 財団法人 日本国際連合協会
日本放送協会
社団法人 日本新聞協会
社団法人 日本民間放送連盟
- 5 テ ー マ 性にとらわれず いきいきと暮らせる時代を築こう
- 6 開催期日 平成4年5月19日（火）
- 7 開催場所 九段会館ホール（東京）
- 8 参加者 婦人団体、青年団体、労働団体、経営者団体、社会福祉団体、職能団体、文化団体、報道機関、関係官公庁、地方公共団体、

その他の団体及び個人 約900名

9 プログラム

開 会

開会あいさつ 労働大臣 近藤鉄雄

祝 辞

国際婦人年日本大会の決議を
実現するための連絡会世話人 松浦三知子

報 告

第36回国連婦人の地位委員会報告
国連婦人の地位委員会日本代表 有馬真喜子

フォーラム

『個性で描く未来形』

基調講演

「私の生き方」 脚本家 内館牧子

体験発表及びディスカッション

(コーディネーター) メディアプロデューサー 残間里江子

グループ ウィメンズ・プレイス 代表 熊丸良子

IBMワールド・トレード・アジア・コーポレーション秘書業務課長 脊戸明子

脚本家 内館牧子

閉 会

閉会あいさつ 労働省婦人局長 松原亘子

Ⅱ 開会あいさつ

労働大臣 近 藤 鉄 雄

(労働政務次官 宮崎秀樹 代読)

本日ここに、全国各地から多数の方々のご参加をいただき、第44回婦人週間全国会議を開催いたしますことは、私の心からの喜びでございます。

労働省では、我が国の女性が参政権を行使したことにちなみ、昭和24年より、婦人週間を設け、婦人の地位向上のための啓発活動を全国的に展開しておりますが、本日の会議は、その集大成といえます。

1975年の国際婦人年から17年が経過いたしました。この間、我が国でも、女性がいろいろな分野に進出し、活躍されるようになり、女性の時代とさえ言われるようになってきております。今後、21世紀を展望するとき、真の男女平等の実現は、男女が性にとらわれず、いきいきと暮らすことのできる社会を築くことにあり、そのために女性、男性がともに努力することが求められております。

そこで、本年は、テーマを、昨年度に引き続き、「性にとらわれず いきいきと暮らせる時代を築こう」とし、キャッチフレーズを「女と男 個性で描く未来形」といたしました。

経済面のみならず真に豊かな社会を実現するためには、あらゆる分野で男女がともに個性を発揮しながら、伸びやかに暮らすことのできる環境をつくることが重要です。

本日の会議が、婦人の地位の向上のための一助となりますことを祈念いたしますとともに、本会議の開催に当たり、ご協力をいただきました関係者の方々に対し、厚くお礼を申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。

Ⅲ 祝 辞

国際婦人年日本大会の決議を

実現するための連絡会世話人 松 浦 三知子

本日は、第44回婦人週間に当たりまして、労働省主催の全国会議が開催されることを、まずもってお祝いを申し上げたいと思います。

44年前の昭和24年に婦人の参政権行使がかないまして3年目に逸早く、この日を婦人週間初日にされたということは、非常に喜ばしいことでございます。初回のスローガンを見ますと、「もっと高めましょう、私たちの力を、私たちの地位を、私たちの自覚を」と決められています。そして、このスローガンをはじめといたしまして、今日まで、国際婦人年を中に挟みまして、婦人問題に取り組んでこられた唯一の行政局としての婦人少年局 — いまは婦人局でございますが — のご努力に感謝いたします。

いま、「性にとらわれず、いきいきと暮らせる」というような、非常に柔軟なスローガンが出てまいりましたが、本当に時代の推移をしみじみと感ずるところでございます。

私どもの団体が誕生いたしましたのは、国際婦人年の年でございます。この年、政府におきまして、11月5・6、両日にわたりまして、日本婦人問題会議を開催されたのでございますが、私どもは、「女性の問題は女性の手でも解決しようじゃないか」ということで、全国の方にお呼びかけをいたしまして、そのとき41の全国的な組織をもった婦人団体や労組婦人部が集まりまして、国際婦人年日本大会を開催いたしました。

ここでは、先ほど申しましたように、昭和21年4月10日に参政権行使をした翌年の22年には、男女平等を規定している憲法ができました。しかし45年経った今日、なお、あらゆる面に男女不平等、差別が介在している現実を直視いたしまして、「なくそう男女差別、強めよう婦人の力」というスローガンの下に、大会を開きましたのが1975年11月22日でございます。

このとき、これから、私どもは、この差別を取り締まるよう取り組んでいこうということで、決議を出しました。その決議を実行するために、「1975年の婦人大会の決議を実現するための連絡会」という団体を結成いたしまして、今日に至っているわけで

ざいます。

大変長い長い歴史をもっているわけですが、私たちは、今日まで思想信条の違いを乗り越え、全団体の合意を得つつこの41団体、ただいまは50団体ですが、連帯と行動を強めつつ進んでまいりました。

国連の総会は、婦人年1975年の翌年に、「国連婦人の10年」を決め、'75年世界会議で採択された世界行動計画の実行に向けて歩みはじめましたが、日本も政府が行動計画を発表。民間でもこれに呼応して動きはじめました。

'79年には、国連は「あらゆる婦人に対する差別撤廃条約」の採択をしております。このとき、50団体の世話人中村道子さんが、政府の代表の1人として出ておられまして、Yesのボタンを押したと、非常に感激的なご報告をいただいたことでした。

そして、この差別撤廃条約は、日本に署名をしてもらわなければならないということが出てきたわけですが。

1980年には、デンマークで、国際婦人年中間世界会議がございました。このデンマークで署名式が行われることになっていたのですが、この署名をするには、批准を前提とされます。

この批准を前提とした署名はなかなかできないということが、政府の態度でございました。1980年7月17日の、署名式が迫っておりました。私どもは、そのときの代表世話人でございました市川房江さんを先頭に、国連局長の賀陽さんとか、ときの首相代理の伊東正義氏とか、大平外務大臣等に、どうしてもこれの署名をしてほしいということを、夜討ち朝駆けと申しますか、そういうことでお願いをいたしましたところ、署名式の前々日の7月15日、ようやく閣議決定されました。代表で、そのときの初代のデンマーク大使の高橋展子氏が歴史的な署名をしたということでございます。そういう劇的な場面が、この差別撤廃条約の署名には残っているわけですが。

この署名をされた高橋さんも、一昨年お亡くなりになられましたし、これに働きかけた市川代表世話人も、その翌年の'81年2月11日に亡くなりました。この市川さんのお棺の中には、この差別撤廃条約をひそかにお入れいたしましたのでございます。

私どもは、その頃、まだ、ご存命でありました市川さんを先頭に、1980年には、この差別撤廃条約を批准しなければいけないということで、これを中心に、また11月22日に、'80年の大会を開きました。

この批准もなかなかできませんでした。それは、いろいろな抵触した法律があったからでございます。その間、国籍法とか、あるいは労働関係の法律とか、あるいは民法、いちばん大きなのは、男女雇用機会均等法が、やっと1985年、ナイロビ会議を前にいたしまして、5月に成立いたしました。この間、労働省のお骨折りは、大変なものでした。

私ども、いまから考えますと、この雇用機会均等法は、必ずしも十分なものではないと思いましたが、批准するには差し支えない法律ができたわけでございます。

そして、もうナイロビ会議が迫っておりましたので、ちょうど来日されておられましたアクレアル国連事務総長に、この批准書を寄託したといういきさつがございます。

ナイロビでは、婦人のための2000年に向けての将来戦略が採択されたわけですが、私どもは、批准されたこの法律が、本当に生かされるような運動をしなければいけないということで、1985年、最終年にも大会を開きました。

このようにいたしまして、私どもは、連帯の下に、50団体合意を得つつ、たゆまず取り組んでまいりました。1988年には、国が「2000年に向けての国内行動計画」を作られましたけれども、民間でも、行動計画を作ったわけでございます。この行動計画をふまえて、一昨年、90年には大会をもちました。

この大会では、二つの決議をいたしました。一つの決議は、中東問題が紛争化いたしておりましたので、この平和的な解決をとということでございました。

その一つは、途上国の女性の自立を助けるために、国連の婦人開発基金を、民間で作ろうじゃないかというようなことの決議でございます。両方とも国際社会に向けても、目を開いてきたわけでございます。

私どもは、そのときどき、いろいろ総理等に要請をさせていただいておりますが、近日、六つの要請を、宮沢総理にいたすことになっております。その一つは、6月に開かれますサミットに女性を代表として送るようということでございます。国連環境開発会議、地球サミットと申しております。これはリオデジャネイロで6月に開かれることになっております。

もう一つは、児童の権利に関する条約でございます。この批准が、いま言われておりますが、この批准を早くするようにと、児童の権利を認めたような批准をするようということでございます。

それから国会議員に女性が進出しやすいような選挙制度を作ってほしいとか、韓国の従軍慰安婦の問題とか、いま申しました国連婦人開発基金、UNIFEMにお金をたくさん出して援助してほしいというようなことも申したわけでございます。また、婦人問題企画推進本部を強化していただき、ここに担当大臣を作っていただきたいということを申し入れする予定でございます。

私どもは、いろいろこういう要求をいたしてまいりましたが、きょう、この日に、一つだけ皆さま方をお願いを申し上げたいことがあるのでございます。

私たちが初めて参政権を行使いたしましたときには、婦人の国会議員が39名も当選いたしております。それからずっと減りまして7、8人、そして一昨年の選挙では、やっと12名になりましたけれども、これは、まだ非常に率が少なく、2、3%ということでございます。これは世界のランクから申しますと、110位ぐらいになるのだそうでございます。到底先進国とは言われない状態でございます。女性の有権者は、男性よりも、いま270万人も多いわけでございます。そして投票率も男性よりも高いのです。どの選挙でも高いのです。

ですから、本当に女性が、女性のために、そして、また世界の平和のために、そして、また福祉のために、国民の幸せのために、いい政治をしてもらうよう、有効な投票をするということが、いま望まれてならないのでございます。

この日を期しまして、どうか私どもの参政権行使のこともお考えいただきたいと思うのでございます。失礼いたしました。

IV 報 告

第36回国連婦人の地位委員会報告

国連婦人の地位委員会日本代表 有 馬 真喜子



今年も、また、こうして、皆様にお目にかからせていただきまして、婦人の地位委員会のご報告をさせていただくことができますのを、大変嬉しく存じております。

時間が限られているということでございますので、ざっとその概要をご報告させていただきたいと思います。

今年の婦人の地位委員会は、3月11日から20日まで、いつものとおりウィーンで開かれました。国連の中で、女性問題を取り扱います婦人の地位向上部がウィーンにあるからでございます。

まず参加国、団体について申し上げます。現在メンバー国は45カ国でございますが、1カ国欠席で、44カ国でした。オブザーバー国は35カ国。このオブザーバー国といえますのは、どの国でもオブザーバーになれるわけございまして、婦人の地位委員会に関心があると言え、ここに出席して、議論に参加をすることができる。

オブザーバー国とメンバー国の違いは、投票権があるかないかということぐらいでございます。関心のある国は、こうしてたくさん出て来るわけでございます。

そして、国際機関とかNGO。NGOも今年は37団体でございました。このようにたくさんの国および団体が参加をいたしまして行われたわけでございます。

手続き的なことを先に申し上げさせていただきますと、会議の役員には、まず今年はアフリカからということで、エジプトのタラウイさんという方を選びました。今年と来年と、この方が議長を務められます。

このタラウイさんという方をちょっと覚えておいていただきたいのでございますけれども、今後、国際舞台で大層活躍される方だと思います。エジプトの大使を務めておられた方でございまして、今回は、女子差別撤廃委員会のほうも議長をなさっております。

そして婦人の地位委員会のほうも議長ということでございまして、世界の女性問題のリーダー的な役割を果たしている女性でございます。大層個性豊かな方でございまして、開発途上国の女性たちのために、何かを一生懸命やらなければならないということで、ときには我々は脅かされたりしながらということもございすけれども、迫力満点で迫ってくる方でございます。

副議長は、各地域から出ますが、アジア地域からはインドネシアが副議長になりました。書記はポーランドが務めました。

議題のなかのプライオリティ・テーマ、これまでも何度かご説明させていただきましたが、ナイロビ将来戦略の中から、これが大事というものを取り出しまして、毎年「平等、発展、平和」の3つについて、それぞれ1つずつ、重点的に討議し、考えているというものでございます。

今年は、プライオリティ・テーマにつきましては、平等が「法律上および実際上の女子差別の撤廃」、開発につきましては、2つございまして、「開発過程への女性の統合」と「女性と環境」というものでございました。平和につきましては「国際協力、平和および軍縮の推進のためのあらゆる努力への女性の平等の参加」というのがテーマでございまして、これらをめぐって様々な討議が行われたわけでございます。

来年のプライオリティ・テーマは何かと申しますと、平等につきましては「女性の権利に関する意識向上」で、特に法的識字能力が大切であるということがテーマになります。

法的識字能力というのは、ここのところ、国際社会ではよく言われるようになったことでございまして、「識字」というのは、字を読んだり書いたりできるということですが、では、ただ読み書きができれば、それでいいのかと。何のために私たちは読み書きをするのだらうというふうに考えてみますと、折角読み書きが出来るんだったら、その能力を使って、私たち女性の権利を守るための法律を知ることの重要性が浮かび上がってきます。法律はたくさんあるにもかかわらず、十分それが認識されていないんじゃないか。そこのところをよく知ろうではないかということが、このところ2、3年非常によく言われておりまして、それが来年の優先テーマ、プライオリティ・テーマになっております。

例えば、先ほど松浦先生から女性差別撤廃のお話がございましたが、条約はあるけれ

ども、私たちはそれをどれだけちゃんと読み、学習し、理解しているだろうか。そこに書かれている私たちの権利がどれだけ確保されているだろうかということになりますと、かなり疑問に思わざるを得ない面もございますもので、そういう意味でも、この来年の「法的識字能力」というのは、大切なテーマかと思えます。

2番目の「開発」の問題に関しましては、極貧女性、非常に貧しい女性の問題、特に国家開発計画への女性の関心の組み入れということでございます。

「平和」に関しましては、女性と平和プロセスで、この3つを、来年でございますが、優先テーマとして取り上げることになったわけでございます。

さて、会議では、いろいろ論議をいたしまして、全部で15本の決議案を採択いたしました。

その決議案の中で、皆様がおそらく最も関心が高くていらっしゃるでしょうし、会議でもいちばん熱心に議論されたのが、1995年世界婦人会議でございます。

今年の婦人の地位委員会の最大のテーマは、1995年の世界会議の場所を決め、そのアウトラインを決めることであると言われておりました。

昨年のこの場でもご報告をさせていただいたと思いますが、1995年世界婦人会議に関しましては、2つの国が立候補しておりました。1つの国はオーストリアで、場所はウィーンでございます。もう1つは中国で北京でございました。今年はどうしても、その場所を決めなければならないということでございまして、本会議と並行いたしまして、最初から最後まで、インフォーマルの、しかし皆が参加する作業会合が行われまして、この世界会議について検討したわけでございます。

場所でございますが、中国の北京に決まりました。日時は、1995年9月4日から15日というふうに、一応定められました。

なぜ暫定かと申しますと、実は、1995年といいますのは、国連の結成50周年に当たります。そのために、国連は非常に大きな行事をするということになっております。世界の各国の首脳がみな集まるという、非常に大きな催しになると予想されておりますので、もし、それと重なりますと、北京の会合に出席なさる首脳の方が少なくなるということもございますもので、それと重ならないようにとか、あるいは、その会合との調整ということでもって、一応9月4日から15日というふうに決めますけれども、暫定ということになっております。しかし、大体このあたりであろうということは間違いど

ざいません。

期間でございますが、当初、事務局から出された案では、正味5日間ということでした。しかし、その作業部会を通じまして、それではいかにも短かすぎる、我々には討議をしなければならないことがたくさんあるのだからということで、正味10日間ということに決まりました。ですから、月曜から次の金曜までという形で世界会議が行われます。

中国は、この会議に非常な熱意で臨んでおりまして、今回も大使が前面に立たれてまして、中国は心から皆様を歓迎する、北京の秋は美しいというようなスピーチをなさいます。熱意をこめて世界婦人会議の招待をなさったわけでございます。

その世界婦人会議の議題でございますが、まずナイロビ将来戦略の見直しでございます。この見直しに関しましては、この場で、2年ほど前にご紹介をさせていただきましたように、1990年に1回その見直しが行われております。1985年のナイロビ会議で「ナイロビ将来戦略」を定めたけれども、それが各国でどの程度実施されているだろう、なお残る問題、現在、女性にとっての障害はどういう問題だろうというような見直しを、90年の婦人の地位委員会でいたしました。その結果、24項目にのぼる「勧告と結論」を出しまして、これをガイドラインとして、1995年までやっていこうというふうに決めたわけでございます。それが第1回目の見直しでございました。

今度、第2回目の見直しを95年の世界会議でやろうということでございます。

やはり、そこでは、ナイロビ将来戦略がどの程度実施されているか、なお残る問題はどのくらいあるかということを検討いたします。

そして、行動綱領というようなものを作ろうということが話し合われております。

「ナイロビ将来戦略」というのは、372項目というような膨大なものでございますが、90年に作りました「勧告」は、24項目と大変スリムになっておりますが、今回も、やはりスリムな行動綱領を作ろうということになっております。

しかし、その行動綱領には、90年の勧告がそうであったように、何年までに何パーセントとか、何年までに何人とかいうような、はっきりした目安の数字をしっかりと入れまして、漠然と、そのように努力しましょうというようなことではなくて、何年までに何パーセントを達成するように努力する、あるいは何年までに何々の改定を終わらせるというような、しっかりと行動綱領にしようということでございます。

3 番目は、地域会議の主な経緯と結論を取り上げようということでございます。ちなみに地域会議というのは、国連は世界をいわゆる西側諸国、東側の国々、アジア、アフリカ、ラテンアメリカと5つの地域に分けておりますが、それぞれの地域で、この世界会議に先立って、地域会合というのが行われます。

アジア地域は多分94年になろうかと思いますが、インドネシアが、いまのところ、インドネシアで行いたいという意向を表明していらっしゃいます。

アジア地域の場合には、いまのところテーマにしたいと言われておりますのはWID、先ほど松浦先生もおっしゃいましたけれども、「開発と女性」の問題でございます。

各地で、そのような形で地域会合が開かれ、それが世界会議に反映されることになります。

4 番目には、そうして行動綱領を決める。それから地域会議で大切なものを決める。それで勧告を出す。しかし、それを実施するための制度的な整備がなければ何もならないわけで、国連においてもそうでございますし、各地域においてもそうでございますし、国においてもそうでございます。先ほど松浦先生も、私ども日本の国の婦人問題推進本部の強化ということをおっしゃいましたが、まさにそういうことでございまして、そのような行動綱領を実施するための制度的な整備も、しっかり、ここで討議していこうというふうなことでなっております。以上4つが主な議題とされております。

これは政府間の会合でございますけれども、同時に、これまで3回の世界会議、1975年のメキシコ、80年のコペンハーゲン、85年のナイロビと同じように、この95年の北京会合におきましても、NGOフォーラムが行われるということが決まりました。

NGOフォーラムは、各国からどのような団体でも、どのような個人でも、婦人問題、いまは「女性問題」でございますが、に関心のある方なら、誰でもが参加できます。過去3回の会合、特にナイロビ会合のときには、日本からたくさんの婦人団体の方々、あるいは個人の方がご出席なさいましたが、今回も同様でございます。

ただ、日程は5日間ということございまして、いつからいつまでということは、これからNGOの事務局ができて、呼びかけが行われることになっております。

NGOフォーラムについては、このように政府のものではございませんが、しかし、いろいろなことが決まれば、その情報を入れてくれるようにと依頼をさせていただきますか

ら、また、情報が入り次第、様々な形で皆様のところにお届けしたいと思っております。

以上が世界会議の主な点でございます。ですから、政府間会議も、また盛り上がるでございましょうし、NGOにつきましても、特に、今度は北京でございまして、日本から非常に近い国でございますから、関心があって、おいでになりたい日本の方も多いと思います。また、今度はナイロビから10年振りでございますから、大きな会合になるであろうと思うし、期待をしております。

時間が限られておりますから、この世界会議以外に、大事なことと言われましたテーマを2、3だけ紹介させていただきます。

その第1は、今年から1995年までの間に、国連で様々な世界会議あるいは何々年というのが行われます。先ほどもお話がございましたように、今年は6月にUNCED、地球サミット、環境と開発に関する世界会議が、リオデジャネイロでございます。来年は世界人権年でございます、世界人権会議が、場所はまだ決まっておりますけれども、行われることになっております。93年でございます。

94年には2つございまして、1つは国際家族年でございます。家族の問題が取り上げられます。この家族年に関する世界会議があるかないかということは、まだ決まっておりますが、家族年であることは間違いございません。と同時に、その年には、人口の世界会議が行われることが決まっております。これも場所はまだ決まっておりますけれども、世界会議を行うことは決まっています。95年が国連50周年でございます。

いま申し上げました「環境、人権、家族、人口問題」というのは、いずれも私ども女性に非常にかかわりの深いものでございます。そこで、今回の会議を通じて言われましたことは、このような会議に女性が深くかかわる、深くコミットすることが大切である、そして、その会議に女性の意見を十分反映させるように、各国でも、国連でも努力をすることが大切であるということで、多くの国から語られました。それが1つでございます。

2番目といたしましては、「暴力の問題」が大層大きく浮かび上がってきております。女性に対する暴力の絶滅というものでございますが、精神的な暴力、肉体的な暴力すべてを含みます。セクシャル・ハラスメントも入るわけでございますし、売買春の問題も入ります。あるいは女性の性器に対する割礼というふうな風習がございまして、そのようなものも入るという、非常に幅広い意味での「暴力」でございます。

この問題がクローズアップされてきておりまして、暴力絶滅宣言を出したらどうかという案が浮かび上がるところまで、クローズアップされてきています。これから95年会議までに、私たちが注目しておかなければならない、私たちもよく考えておかなければならない問題だと思います。

世界会議以外では、大きなところでは、以上2つでございます。

与えられた時間がまいりましたもので、非常に簡単でございますが、以上で第36回国連婦人の地位委員会の概要のご報告とさせていただきます。95年まで一緒に努力をしてまいりたいと思います。お聞きいただいて、どうもありがとうございました。

V フォーラム 『個性で描く未来形』

(コーディネーター) メディアプロデューサー 残 間 里江子

皆様、ようこそおいでくださいました。本日、これからのフォーラムの進行役をさせていただきます残間でございます。私は、メディアというのは、人と人や、人と情報や、物と情報や、何かと何かをつなぐと言いますか、「媒介」とか「媒体」というふうに訳しますが、日常の仕事は、出版物を作ったり、コマーシャルを作ったり、あるいは、今日のようなシンポジウムやパネル・ディスカッションの企画制作をいたしましたり、最近では、国土庁のリゾート法を見直す委員会の委員などもやっております関係で、都市開発ですとか、ホテルのプランニングなどもやっております。

言ってみれば、何の装置もないところに、できるだけたくさんの人の目や耳や、あるいはエネルギーを集めるという、その装置を作っていくというふうな仕事ですから、日常は、いろいろな人たちの集まりやかたまりがあれば、あれは一体何なんだろうかと思って、自分の足で出かけて、自分の目でそれを見て、それで何か表現するものを作るというふうな仕事でございます。

きょう、ずっと第1部からのお話を、楽屋で聞かせていただいたんですが、基本的なことはきちんと押さえなければいけないのは、いま、世の中の基本でございますが、でも、しかつめらしく論議をすることばかりでも、なかなか解決がつかないぐらいに人々の思いや、関心や、エネルギーは拡散していつているのも現状だと思います。

第2部は、できるだけ皆さんの生活の実感に近いようなところで、世の中が大変変わっていると言われていますが、どんなふうに変わっていて、私たちはその中で、どんなふうに進歩を進めていけばいいのかというあたりに焦点を置いて、のちほど皆様の質疑応答という形で、直接お声も聞かせていただきたいと思いますので、是非よろしくお願ひしたいと思ひます。

いまも言ひましたように、女性の問題のみならず、世の中が本当に変わっております。私も、婦人問題企画推進有識者会議のメンバーに、昨年秋から入れていただきまして、女の人の問題もなかなか難しいなと、女だけで言ひていても難しいと、日本だけで言っ

ていても難しいということで、はたまた世代的な交代が、様々なシーンで繰り広げられていますので、こういう基本を押さえたきちんとした、考えなければいけない問題が、果たして次なる若い世代にどう受け継がれていくのかと、お役所や企業のトップが憂いたり考えたりしている問題が、果たして若い世代にリアリティーをもって受け継がれていくのかどうかと、遊離してはいないだろうかというあたりも、メディア・プロデューサーという仕事柄、気になるところでもあります。

きょう、このあと基調講演をいただきます内館牧子さんは、1948年生まれで、ほぼ私と同世代、いわゆる団塊の世代という戦後の1,000万人ぐらいいると言われている人口の中にいらっしゃるわけです。秋田でお生まれになって、東京で育ちになりました。武蔵野美術大学を卒業して、三菱重工の横浜造船所に勤務して、13年間のOL生活、いわゆる普通の生活をしていたという日々が長くて、そこから次なる変身を通じて、脚本家におなりになった。メディアを通して内館さんのことを皆さんがお聞きになると、もうシンデレラ・ガールのように、ある日突然、脚本家になったみたいに言われがちなんですが、決して、そんなことはないのではないかと、私などは、いろいろな女の方に会ってますと、何か、この時代の中で自分で手にしていられる方は、必ず何かを差し出しているという感じがいたします。

きょうは、内館さんのお話の中から、女の人が、いま働くということはどういうことで、突然のように私たちの目に映る内館さんの活躍振りの中に、行間に漂う苦労とか、そんなものもきっとあったに違いないというあたりのお話をさせていただこうかなと思っております。

作品はとて多くて、ご紹介するのは大変なのですが、ご本人もちょっと異論があるようですが、いわゆるトレンド・ドラマという時代の先端の若い人たちの兆しですとか、若い人に限りませんで、人間の関係性の問題みたいなものをとらえていらっしゃる。ドラマが多いのですが、最初に向田邦子さんの作品の、NHKの銀河小説の「男時女時」の脚本からデビューなさいます、そして「想い出に変わるまで」などという去年、おとし、今年あたりにテレビを賑わしているドラマのヒット作品を多く手掛けられています。この10月からは、NHKのテレビ小説の「ひらり」というのが始まりますが、その脚本も担当なさることが決まっております。

それでは、内館さんを早速お招きしたいと思います。内館さんどうぞ。

基 調 講 演

「私 の 生 き 方 」

脚 本 家 内 館 牧 子

脚本家の内館牧子でございます。大変短い時間なのですけれども、お話できることを、とても喜んでおります。

私が基調講演をするというのは、ちょっと基調が外れないかなと思って、やや心配しているのですけれども、どうぞ気楽に聞いてください。



私は、1948年の生まれでして、ただいま43歳です。ところが、実際に書いているドラマというのは、20歳代の前半、ときには、10歳代の男の子なんかも書くことがあります。その中で、私自身の中に、いくつか若いドラマを書くうえで、いろいろな思いがあります。

その1つには、基本的には、昔の女の人も、今の若い女の人も変わっていないということがあります。それは基本的なところですが、確かに例外はありますが、それは昔だって例外があったわけですから、今の女の子たちが非常に性的に解放されているということがあったり、男たちが皆弱くなったということがあったり、そういうことは全部マスコミで流されますけれども、男たちが弱くなった、だからつまらなくなったということを、どこまで確かめて言っているのかと思います。雑な情報を信じこむというのは、非常に危ないという気がします。もちろん一人ひとり確かめたわけではありませんけれども、私自身は男たちはちっとも弱くなっていないし、女たちもちっとも、えげつないほど強くなってないという気がします。

それは、「男たち弱くなったよね、女たち強くなったよね」と言うのが1つの免罪符なのです。それを言ったところで、どうなるものでもないのに、それを言ってしまうと、何となく、今風な気がしてスタートしてしまうと。つまり「バブルがはじけたからね」と言ってしまうと、何でもそれで通るというのと一緒に、実際に「バブルがはじけたからね」と言ってしまうと、何となくすべての理由になるというところがあるわけです。

ドラマというものは、そういうところからスタートすると、非常に危険なんです。例えば、いつもドラマを書いているときに思うのですが、若い人たちというのは、つまり10歳代や20歳代の男の子や女の子というのは、「これは、おれたちの世界じゃない」と思うと、ピシャッとテレビを切ってしまいます。これは鮮やかなまでに、一刀両断に切ります。それは、私たちみたいなビートルズ世代でも、やはりビートルズがわからない大人たちというのは切りました。それと同じで、今の若い人たちというのも、切ってしまいます。

それは、例えばドラマを書くうえで、私が非常に注意していることが1つあるのですが、「パワーのない言葉は使わない」ということなのです。「パワーのない言葉は使わない」ということが、どういうことかと申しますと、例えば「明るい未来」、「豊かなあした」、「安らぎのある町」。これ何ですか、と言いたくなりませんか。きれいな言葉なのです。「豊かな未来」、あるいは私は「豊かなあした」と言ったか忘れちゃったけれども、忘れちゃうぐらいなものです。

1つの例ですけれども、「豊かなあした」というパワーのない言葉を台詞の中に使いますと、突然、若い人たちは、もう「パス」となります。それは「明るい未来」、「明るいあした」、「安らぎのある町」、「ゆとりのある暮らし」など全部そうです。

こういうものは、やはりテレビドラマというのは、映画に比べて、文化ではなくて、産業だとか、いろいろなことが言われていますけれども、非常に生鮮食品であることは間違いないんですね。言葉にしても今を生きてなければならぬ。

ですから、「豊かな未来」と言ったときに、若い人たちがついて来れなくなって、「馬鹿みてえ」、「くだらねえ」って言い出したものというのは、やはり、今のものではないんです。

やはり、今をキャッチして切り取っていかねばいけないという意味では、大変にトレンドであるということを要求される仕事だと思っています。ですから、大変に面白い仕事です。

私自身は、いま、そういう思いでドラマを書いていますけれども、自分のことを考えますと、とにかく動くしかないというのが、私の中にありました。

それで今回、NHKの朝のテレビ小説で「ひらり」という大変面白い名前のドラマを書きますけれども、これは主人公の女の子の名前です。薮沢ひらりという女の子なので

すが、「ひらり」という名前をどこから付けたかという、1つには、私の気持ちの中に、たくさんの20歳代の人たちとお会いして、いまの20歳代の人たちは、世の中の大人たちが考えているほどすれてもいないし、くさってもいないし、強くもないよというところがあったんです。

それで、彼女たちがわりと深刻にいろいろなことを悩むんです。恋愛のことにしても、結婚のことにしても、仕事のことにしても、わりと一生懸命悩んでいます。それは私が20歳代だったころも、いまの60歳代の方が20歳代だったころも、その考える真摯な度合という意味においては、一緒だと思います。

ただ、週刊誌で「おっぱい見せて」というグラビアで、パッと見せちゃう人たちも、確かに増えているわけです。でも「おっぱい見せて」が全部だと思ってしまうと、非常にそこが危険なんですけれども、私は、いまの女の子たちは、常に真摯に物事を考えていると思っているものですから、「とにかく一生懸命考えるのもいいけどさ、ひらりと飛んでみようよ」という思いがあったもので、「ひらり」という名前を付けました。

その中で、私が何を書こうかと思ったかという、私自身の、もちろん、そのままではありませんけれども、いままで、いろいろなことを男と女の社会の中で考えてきたことを、20歳のとびっきり元気のいい下町の「ひらり」という女の子に合わせたいと思いました。

私は美大を出たあと、大変就職難の時代でしたので、叔父がいたもんですから、コネで三菱重工業という大企業に入ったんです。そのころは、私は普通に生きることしか考えておりませんでした。つまり、ごくごく普通に結婚をして、母親になって、仕事はしないで、お家にいて、うちの母が、やはり全く仕事をしたことのない母親だったんですけれども、私たちに洋服を作ってくれたり、クッキーを焼いてくれたり、そういう暮らしをすることしか考えてなかったんです。

一昨年、私がニュース・キャスターの小池ユリ子さんと一緒に、ある賞をいただいたときに、楽屋でお会いしたら、私と小池さんの差というのが、くっきり出たんです。それは、小池さんは、これからの女は普通じゃいけないと、普通にならないように生きようと思ったと言うのです。ですから、彼女は、高校を出ると同時に、これからは英語やフランス語じゃなくて、アラビア語をやると決めて、カイロの大学に行った。

私は、普通に生きようとしか思っていなかったから、危ないことは全部やらないで来た

んです。ですから、いまでは考えられないぐらい品行方正に堅く生きてきたんですけれども、あるときに、はっと気が付いてみたら、適齢期をやや過ぎていたんです。当時は、お茶受け代わりに「結婚まだ」と言われる時代でして、それはいまも、あまり変わっていないと、OLの人たちは言います。

私は、その中で「結婚まだ、結婚まだ」と、朝から晩まで「結婚まだ」と、「何とかちゃんは、もう2児の母だよ」と、そればかり言われてきました。「早けりゃいいもんじゃねえよ、パン食い競争じゃねえんだ」と私はお腹の中では毒突くんですが、なにせ、いい子をやっていないとますます売れ残るものですから、それは言わないのです。「本当、困っちゃって、いい人いたら紹介してください」と言って過ごしてきたんですけれども。私は、結構、男の好みがるさいものですから。185センチメートル120キログラムというのが、私の理想なんです。玄関を入るときに、ちょっと横になったりするぐらいの大男というのが、すごく好きで、残念ながら全然出会ったことがないので、売れ残っているのですけれども。ご免なさい、すぐ話がそれまして。その会社の中で、とにかく普通に生きることにしか考えていなかったんです。

ところが、普通に生きようと思って、何もできない、一つも取り柄のない女が、普通に生きるルートをちょっと外れちゃった場合、これは、生きていてご免なさいの世界になっちゃうんです。特に普通のOLの場合は。朝から晩までコピーをしたり、ちょっと簡単な文書のリライトをしたりということでしたので、あした私が駄目になっても、すぐにボンと別な人がきて、彼女がすっとできちゃうような仕事をやっていたわけです。

それで、2年目に、これではいけないなと思いました。つまり、どこにも私の居場所がなかったんです。私の中で、そのときに強烈にスペシャリスト願望というのが生まれたんです。スペシャリストというのは、例えば、医者になろうとか、弁護士になろうとか、そういうことじゃなくて、母親もそうです。母親というのは、やはりスペシャリストだと思うのです。つまり、私が言う「スペシャリスト」というのは、誰かが必要としてくれるということだったんです。母親というのは当然子供が必要としますし、妻であれば、夫が必要とします。夫は外で浮気をしているということもあるかもしれませんが、とりあえず名目上は必要としています。それから、例えば教師であれば、生徒が必要とするでしょうし、美容師であれば、固定客が必要とする。

そういう中で、誰でもできる仕事をやって、簡単にすぐ替えがきくという人生を、こ

れからずっと送るんだとしたら、これは困ったなあと思ったのが、24歳ぐらいでした。それから、すぐにスタートを切って、何か自分にとってきちっとした居所があるような方向を考えようとすれば、よかったんですけども、これも、ごく一般のブランド企業に勤める〇しにありがちなことなのですが、私も三菱重工という大変立派な企業に毒されておりまして、飛び出すのが、非常に怖かったです。

実は、27歳から29歳までの間に、私は27社の中途採用の試験を隠れて受けています。土日です。半分ぐらい受かっているのです。ところが採用通知がくると、三菱重工と比べるんです。三菱重工というのは、私がいた当時で、1,200億円の資本金がありまして、地球レベルで三菱カンパニーがあったり、駐在員事務所があったりということもありました。社員も10万人からいて、何千万トンタンカーなどというのを造っていたわけです。

そういうところと、私が受けた小さな出版社とかアパレルメーカーを比べるということ自体が間違っているんですけども、やはり怖いんです。それで、「えっ、社員5,000人、これは、あした潰れるよ」となっちゃうのです。

いま考えると、5,000人の企業がどうして潰れるかと思うんですけども、10万人の前にあっては、5,000人というのは、もうアリミたいなものだったんです。資本金2,000万円、わぁ、おっかないとなるんです。

丸の内のご真ん中に三菱のビルがありましたので、小さな雑居ビルの会社だったりすると、もう駄目なんです。それで、結局、動けなかったんです。

それでも、自分の気持ちの中には「とにかく動けなくちゃいけない、動けなくちゃいけない」というのが、すごくありました。

それで、結果的には、24歳で、これは危ないなと、何かしないと、私は生きているんだか、死んでいるんだか分からない人生を送ることになるなと思いながら、会社を辞めるのにそれからなお10年かかっているのです。

その10年の間に何をしたかということ、やはり自分で考えると、非常によく動き回ったという気がします。

私は、いまでもそうなんですけれども、組織の中で働くということが非常に好きなんです。残念ながら、いまは1人で仕事をしていますけれども、組織の中で働くというのが、非常に好きで、管理されるということも、結構嫌いじゃないんです。もともと、体

育会で、ずっと水泳部で、大学はラグビー部で、会社にいたときは、13年間ヨットに乗っていました。つまり皆がばらばらな自由な方向を向いて、好きなことをやるというのではチームは動かないのです。だから皆で、それこそ怖い言葉ですが、一丸となってヨットを動かすと、一丸となって水泳の練習をするということに慣れていた。わりと体育会的なマゾで嫌いではなくて、そういった意味で、組織の中で、ある大きな仕事を皆で勝ち取ってということは、やはり生理に合ったんです。

でも私は、ここにいてもしょうがない、何とかしなくちゃと思いました。どうしようかと思ったときに、まず、ここは辞めないと決めたんです。脱サラをするということが大変強くて、いいことのように書いているものというのもありますけれども、私は、脱サラをせずに、企業の中に残るということも、同じぐらいパワフルなことであり、強いことだと思っています。

ですから、私は企業の中に残ろうと決めたんです。「よし、残るぞ」と決めたときに、どうするか。ここからは、もう、これからドラマの中でひらりにも、どんどんやらせますけれども、まず企業にかけ合ったんです。私に仕事をくれと。

やはり、男社会ですから、残念ながら、女の人は出世の道というのは、一つもありませんし、給与体系も違っていました。とにかく私はポストも含めて上昇しようと決めたんです。

決めて、どうしたかという、上にすぐかけ合ったんです。そのときに、「私に仕事をください」とか、例えば「女にも働かせてください」とか、そういうのは、私にとって、「豊かな未来」と一緒に、パワーのない言葉だったんです。

ですから、とにかく具体的に、遊離しないように、きっちり私の気持ちをどう言ったらいいかと、いつも言葉を考えまして、部長に言いました。これは本当に言ったんです。「部長、私は三菱の旗を背負って働く用意があります」と言ったんです。これのどこが「豊かな未来」よりも立派かと言われると、ちょっと答えに窮するのですが、でも私は、それが、自分の気持ちを出すうえで、いちばんピッタリの言葉だと思ったんです。もともとは私は、「女にも仕事をくれ」とか言って騒いでいる暇があったら、「メイクの仕方習ってきれいになれ」というタイプなんです。

それでもかけあったんですから切羽つまってたんでしょうね。それで、「三菱の旗を背負って働く用意があります」と言ったら、部長が「そんな用意はいらない」と言っ

たんです。それでガックリきました。部長は「君がくれたおいしいお茶が、男たちを元気にする」と。だから私は「お茶は家に帰って飲んでくれ」と言ったんです。そしたら、「そういうもんじゃないんだ。うちの会社は女たちに優しい心と明るい返事を要求している」と。

確かに私は、会社のチョイスの方法を間違ったんです。いい会社だったんですけども、私にとってはよくなかったんです。とにかく、その年は引き下がりました。

それで、「このまんまじゃ済むか」と思ったんです。「やるぜ」というのがあって。なんせ小林旭が好きなものですから。それで「よし」と思って、日活の映画スターのように、背中に哀愁をにじませながら、次の年、また、やりました。

会社の中の全員に人事調査票というのが配られるのですが、それに、どんな仕事をしたいかということ、現状にどんな不満があるかということを書き、部長に提出するわけです。それについて、個人面談をする。

これも、本当にかわいらしい差別なんですけれども、女の方は、入社5年以上経ってから、それを書きます。男の方は入社5年目から書くのです。けれども、まあ、そんなものだと思って、そういうつまらないことに盾突くことで、私は労力を使いたくなくなったものですから、とにかく、私が入社5年目か6年目に書くことになって、つまり27歳になって、その人事調査票というのをもらいました。

そこにぎっしり書いたんです。私はこんな仕事がしたい、会社に対して、こんな不満があると。ただ、1点、いまになって反省しますと、それは通用しないというのは、無理な話なんです。つまり、私は「何ができる」というのがなかったんです。

いまの女の人たち、どうしても無理ないんですけれども、権利は主張するんですけれども、「何ができる」ということがあまりないのです。男女平等だと騒ぐ前に、何ができるかということなんです。つまり、アラビア語ができるよという小池さんみたいな人がいれば、当然、会社だって、うまく利用する方法だって考えるはずなんです。ところが、私は何ができるということが、一つもなかったんです。これは見事なまでになかったです。

何ができるということがないのに、女はかくあるべきだとか、会社はかくあるべきだとか、旗を背負わせろと言ったって、会社だって、冗談じゃないですよ。利潤を追求するのが企業というものですから。それを書いたときに、面接を受けました。そうしたら、

部長が「まあ、わかるけど、そのうち飯でも」と。女は必ず飯でごまかされるのです。私は、東芝日曜劇場の部長の台詞に書いたことがあったんです。「まあまあ、飯でも」と。馬鹿受けしまして、全国のOLから山のようにお手紙をいただいたんですけれども。私は、そこで部長に「飯はいらん」と言ったんです。「飯はいいから、私のこの問いに対して、会社はどういう答えをしてくれるのか」と。いま思えば、噴飯ものです。何もできないのに言ったんですから。そうしたら、「ちょっと時間をくれ」と言われました。それで引き下がったんですが、そのあと、1年間の時間をもってしても、返答はなかったんです。

普通、そこで結婚しようと思うのですけれども、「結婚はいつでもできるや」という思いがありました。いまになってみると、いつでもできないということが、よく分かったんですけれども、とにかく結婚はいいと、私は、35歳ぐらいまでの間には、仕事の基盤を作るぞと、本当に信じられないぐらいの体育会系ののりで思いがあったんです。

それで次の年、また、この人事調書に、「よし、去年とは別のパターンでいこう」と思って、弟に頼んだんです。つまり、私は日本語でぎっしりと、私の思いというのを書いて、それを弟に渡して、たまたま弟が広東語と英語を話すものですから、これを広東語と英語で2種類翻訳してくれと言ったんです。1カ国語1万円と言われて、私が大枚2万円を払いまして、弟が書いて、それを自分の字で丸写ししまして、A4ぐらいの紙に、上から下までぎっしり、真っ黒になるぐらい、私がどんな思いで仕事をしたがっているかということを書いたんです。

その中には、とにかく私は、具体的にやらなければ、すべてのことにパワーがないというのが、人生観みたいにあるものですから、こんな仕事がしたいとか、あんな仕事がしたいとか、かなり具体的に書きました。

当時、イラクのキルクークというところ、山の中なんですけれども、そこで三菱重工は、LNG地下タンクというのを作っていました。ナチュラル・リキッド・ガスというのを、零下168度まで冷却して、そのタンクの中に保存するんです。そこを作るために、たくさんのエンジニアが、キルクークという砂漠のど真ん中に赴任していたんですけれども、弟が結果的に英語で書いたんですけれども、そこに行かせてくれと書いたんです。

ところが、私は、このとおり、英語ができると、広東語もできると。全然できないん

ですよ。これだけの力のある女を放っておくのはもったいないではないかと、私は、そのうえ非常に料理もうまいと。料理は全然できないんです。

実は、本当に恥ずかしいんですけれども、それで、またも「海外に三菱重工の旗を背負って出向く用意がある」と。「それもニューヨークやパリなどと格好いいことは言わない」と。本当は、そういう思いはあったんですけれども、それを言っただけだと思ったんで、私は「イラクのキルクークに行く」と、「そんな格好いいコーディネートとか、そういう仕事はしない」と、「飯炊き女で雇ってくれ」と書いたんです。

弟が「飯炊き女」をどう訳したか知りませんが、とにかく飯を炊く女として、彼らにおいしい料理を提供すると。それも一つの三菱の旗の背負い方であろうということを書きまして、出したんです。

それは係長から順に部長まで行くんですけれども、最初に係長に出すんです。私は、すごく自信満々、係長に「はい」と出して、何と言うかなと、すごく楽しみだったんですが、ほんの一瞬ちょっと見て、「内館君」と呼ばれたんです。「はい」と言って行ったら、「これ日本語で書いて」と。全部鉛筆で書いていましたので、きれいに全部消しました。それで、ひとこと「一切不満はありません」と1行書いて出したんです。

あれだけびっしり書いていた英文が、たった1行になったということを見たときに、会社側は何か気が付くはずなんです。ところが、「あっ、どうも」と言って、ホルダーに綴じました。それで面接があったんです。

面接のときに、「そうか、君は何も不満はないか」と言うから、「はい、ありません」と。

それで、私の中で、「ああ、どうにかしなきゃなあ」という思いの太い1本の綱の半分ぐらいが切れたんです。そうしたら、次に完璧に綱が切れるということが、それからしばらく経ったときにあったんです。

それは、会社の中にたくさんのプロジェクトチームがありまして、プロジェクトチームの中でいろいろな仕事をしているわけですけれども、私は社内報編集プロジェクトというチームにおりました。つまり実際に社内紙を編集していたわけです。ある時、プロジェクトチームの名簿を作ることになったんです。編集発行人からずっと名前が書いてあって、発行人は社長だったり、部長だったりするのですが、いちばん下のところに「編集事務局」として、実際に編集している人の名前が2人書かれるんです。その下

書きを、私の下にいた若い男の人が見せてくれました。「内館さん、これでいいですね」と。見たらば、「編集事務局」というところには、私の名前が上に書いてあって、その下にそれを書いた彼自身の名前を、彼が書いていたんです。

たくさんプロジェクトチームがありましたけれども、女の名前が、たぶん書かれたのは、その時点で、私が最初で、1人だったと思います。

その下書きを見て、「これでOK」と。彼はそれを上覧したわけです。判子を突いて、はじめて印刷されるんですけども、そして、しばらく経ったら彼が、すごく困った顔をして私のところに来て、「内館さん、すみません」と。「どうしたの」と言ったら、「これ」と言って見せたんです。私が「OK」と言った編集プロジェクトチームの名簿に、私の名前が書いてあったところに、スパッと赤鉛筆で横線が引張られていて、全く編集業務とは関係のない係長の名前が書いてあったんです。

そのスパッと横線が引張ってあった赤鉛筆に全くためらい傷がなかったんです。バサッという感じだったんです。「よし、辞めた」と、そのとき思ったんです。

その時点で、私は完璧に切れまして、「よおし、もう次のこと考えよう」と。女が本当に強くなるのは、組織の中で強くならなければいけないと私は今でも思っています。どんなに優秀なピアニストが出ても、どんなに優秀な画家が出ても、彼女個人の才能でやっていることであって、女の地位がレベルアップするというのは、ちょっと違うという気がするんです。

ですから、私は、組織の中で強くなるということが、いちばん女にとってすてきなことだという思いが、それまでもあったんですけども、その2つの事件でもって、私は、やはり残念ながら「辞めた」と、「これで頑張っていたら、私お婆さんになっちゃう」と思ったんです。

お婆さんになるまで我慢するほど、私は人生を捨てていませんので、やはり若いうちに、とにかく、もっと自分の居場所を探そうと思って、それから企業を辞めるということ、かなり真剣に考えたんです。

それで、あるとき新聞広告の中で、シナリオライターの養成の学校のPRを見ました。その時点で、私は、とにかく行動することと、行動をするうえでのパワーというのは、プラス志向でいこうというふうに思っていたんです。できないことを数え上げると動けなくなっちゃうのです。アラビア語もできない、英語もできない、料理もできない、子

育ててもできない、できない、できないだと、全然動けない、できることだけ探そうと。

2つあったんです。一つは大相撲です。これは私は信じられないくらい得意なのです。とるのは駄目なのですが、解説しろと言われたら、結構できてしまうくらい得意なのです。ですから、女が土俵に上がるなどと言ったときには、「ふざけるんじゃないか」というのがあって、いきりたったんです。大相撲に関しては、美学という意味で、非常にうるさいところが私自身にはあります。

もう一つは、文書を書くのが速かったんです。これは、うまいのではなくて、速かったんです。大相撲か文章を書くことが速いということか、プラス志向で考えたときに、この2つが残ったので、どっちかにしようと、このどっちかを仕事にするぞと決めまして、どっちを仕事にするかといったら、好きなのは大相撲のほうですから、すぐ相撲協会に電話をかけました。

こういうときは、ためらってはいけないのです。何でも即断。それで、すぐに相撲協会に電話をかけました。私は力士のことでやりたい仕事があったんです。それは力士の大銀杏、まげを結う床山になりたかったんです。これはスペシャリストだと。誰もお嫁に行けとは言わないだろうと。横綱のまげを結う人がいなくなったら困るものというのがあって。

相撲は男女平等ではありませんので、女の人ができないというのは、十分知っていましたけれども、そこで知っているからといって、電話をかけないというのは、やはり、そこから動けなくなりますので、すぐ相撲協会に電話をかけて、「すみません、床山になりたいんですが」と言ったら、出た人が一瞬絶句しまして、「お嬢さんがですか」と言うから、「はい、私がです」と。「駄目なんですよ、相撲というのは、男女平等じゃないんです」「はい、わかりました」と、すぐ電話を切ってしまったんです。

私は、企業の男女不平等には怒るんですけども、相撲の男女不平等には全然怒らないのです。大好きなんです。だから、「わかりました」と。それで床山はやめました。これは「ひらり」の中で書きます。

床山を諦めた結果、何になろうかと考えたときに、これは相撲記者だと。原稿も書けて、相撲も見れると。「一石二鳥ではないか」というので、すぐ、その足で、また動いたんです。それでベースボール・マガジン社から新聞社から、あらゆるところに、今度は、この身をもって日参したんですけども、年齢的な問題で、やはり採ってもらえな

かったんです。

それで、「これは、相撲は駄目だ」となったときに、たまたま見付けたのが、シナリオ学校の広告だったんです。シナリオというものがどういうものか、私はわかりませんでしたし、昼日中から暗い映画館に入って、映画を見て、外に出たら、まだ明るかったというのは、私にとっては、何となく人生を冒瀆しているみたいな気がするのです。やはり農耕型で、お日さまが出たら働いて、沈んだら眠るというのが好きなものですから、「うーん、映画ねえ…」と思ったんですけれども、キャッチコピーにだまされてしまったのです。「業界は若い力を求めています。プロになるまで指導します」と。求められていて、プロにしてくれるんだったら、こんないいことはないと思って、学校に行きましたら、これが映画青少年の集まりでして、私には、全く生理的に合わないところだったのです。

これは駄目だと思って、1日で、すぐやめたんです。こういうときに、「もうちょっと通ってみよう」とか思う発想というのはないのです。「時間が無い、やめた」と言っていて、すぐ映画学校をやめまして、何をしたかという、ゴルフスクールに行ったんです。

プロゴルファーになろうと思ったのではなくて、会社をもっと居心地よくする方法を考えるしかないなど、そのためには何だろうと考えたときに、ちやほやされればいいんだと、だけれども、年齢的に上になってきているので、古手のOLというのは、ちやほやされることがありませんので、どうしたら、ちやほやされるかと考えたら、ゴルフがうまくなればいいんだというとてもない発想だったのですが、当時、女の人があまりゴルフをやっていませんでしたので、「よし、これでゴルフがうまくなろう」と思って、ゴルフスクールに通ったんです。

ゴルフスクールに通う前に、スクールと同時に、会員券を買いまして、当時、非常に安かったんですけれども、ゴルフを一生懸命始めたのです。

ところが、やはりゴルフもうまくならないし、自分の気持ちの中では、趣味は生きがいにはならないよというのがあったものですから、仕事がしたい仕事がしたいと、でも何にもできない、どうしようどうしようとして出口を探しているみたいなどころがあったものですから、うろうろしていたのです。

そういったときに、お友達が「海外旅行をしようか」と。私もだいたい人生にしらけて

いましたので、「いいよ」と、「どこ行くの」と言ったら、「ニューヨーク」と言うのです。いまみたいにニューヨーク情報が街中に溢れているときではありませんので、私もニューヨークのことに興味もなかったし、ほとんど知りませんでした。彼女と一緒に、安いツアーを探してきて、ニューヨークに行ったんです。

ところが、9日間の旅行のうちの2泊3日のニューヨークというのが、私の人生観を根こそぎひっくり返してしまったのです。それは信じられないぐらいのひっくり返し方でした。

あとき2泊3日で、私は、JALパックでニューヨークに行っていなかったならば、絶対に脚本家にはなっていなかったと断言できます。

それは何だったのかというと、何ということはないのです。何があったわけでもないのです。ただ、ニューヨークにいらっしゃった方はおわかりのとおり、クイーンズ区に私は夜着きまして、バスでマンハッタンに向かって行ったんですけれども、ニューヨークの摩天楼というのは、ちょっとずつ見えてくるのではないのです。あるときドカンと目の前に出てくるのです。私は、もともと人工的なものが非常に好きなのです。スイスなどに行っても、寝てばかりいるのです。山ばかり見ても、かったるくてしょうがないみたいなのがあって、自然破壊と誤解されると困るのですが、そういう意味ではないのです。

つまり、山だとか海だとか、美しい鳥だとかいうのは、神が造った創造物であるから立派に決まっていると、貴いに決まっていると、だけれども、愚かな人間どもが一生懸命英知を寄せ合って造ったビルディング、60階建てが建ったり、飛行機が空を飛んだり、橋が架かったり、「これはすげえよ」というのがあるものですから、私はとにかく、そういう意味で人工的なものというのは、非常に好きなのです。そちらからパワーをもらってしまうほうなのです。

ですから、いまでも、環七のど真ん中に住んでいます。窓を開けると、ガアッと車の騒音がきて、「よおし、やるぞ」みたいなものがあるのです。小鳥などにさえずられちゃうと、もう東京に帰りたくなるたちなのです。

それで、たまたま、そのニューヨークに行ったときに、ドカーンと摩天楼が見えてきた。夜だったものですから、実にきらびやかだったのです。

それで、すごくショックを受けて、翌日の朝早い時間に、私はホテルを1人で抜け出

しまして、摩天楼の5番街のど真ん中に立ってみました。そうしましたら、360度ウーと摩天楼で、目の前にパンナムビルがあって、その摩天楼が私のほうに斜めに覆いかぶさってくるみたいにワアーとあったんです。

いま思えば、そのときに、私は、やはり何かがひっくり返ったと思います。大変くさい言葉なのですが、人間というのは、これだけのものを造る能力がある。なのに、私は日本という非常に優しい国で、コピーが嫌だとか、できることがないのに、キルークにやってくれなどと、よくもぐだぐだ言っているなあと思ったときに、「私、生き直そう」と思ったのです。

どのぐらい、そこに立っていたのか分かりませんが、ぼんやりしていたら、ニューヨークの通勤時間になりまして、ちょうどフェミニズムの運動がニューヨークで始まったころだと思うのですが、女たちは非常に肩に力が入っていました。肩に力が入って、アタッシュケースをさげて、誰も笑わないで、本当にまなじり決して、戦場に赴くという女たちが怒濤のようにマンハッタンの街並みを歩き出してきたのです。

そのときの顔というのは、決して、いま思うと、しなやかでもないし、きれいでもないと思いますけれども、少なくとも、のんびんだらりと不平、不満ばかり言って、やることもやらないでいる女たちよりは、私は、やはり美しかったと思います。

それが私の中で強烈な、マンハッタンのビルと女たちの動きというのが、ショックでした。

とにかく私は日本に帰ったら、生き直そうと思って、あとサンフランシスコとロサンゼルスも回ったんですけれども、ほとんど何も覚えていなくて、いきがかり上ケーブルカーに乗って、手なんかを振って写真を撮りましたけれども、どうでもよかったのです。

それで、日本に帰って来まして、それから臆面もなく、シナリオ学校に入り直しました。それから、年間、OLをやりながら、260本映画を見て、体育会ののりですから、練習メニューを作って、しっかり宿題を書いて、シナリオの勉強を、ターゲットを決めてやったわけです。

その結果、たまたま非常にラッキーだったと思うのですが、たった1本だけ通った佳作の作品で、プロになってしまいました。

いま思うと、何か本当に、よく、まあ、いろいろ動いたなあと思いますけれども、それはそれなりに結構面白かったのです。やはり、動かずにずっと「どうしようどうしよ

う」と、「できないね」と、「でも何かやんなきゃね」と、「何やればいいんだろうね」と、「わかんないね」と言いながら、お好み焼きをひっくり返していても、結局、何も進まないというのが、いまでも私の中にはあります。

私の仕事は、あしたの分からない仕事ですし、いつ書けなくなるか分かりませんし、私自身も、いま、こんな偉そうなことを言っている、苦し紛れに、あしたは「明るい未来」という台詞を書いてしまわないとも限らないのです。

そうになったときには、この仕事というのは、大変冷酷ですから、バサッと私は一刀両断に切られると思います。「それも、いさぎよくていいや」というのがあります。私自身、好きなことを仕事にできた一時期があったということは、人生の中で儲け物だなという思いもあります。

ただ、それを利己的な意味で言うのではなくて、やはり、これから、できるだけいい作品を書いたり、時代と一緒に動けるように、感性を研ぎ澄ましたりという努力だけはきっちり動きながら、具体的に具体的にやっていかなければいけないあと、とても思います。

きょう、ここにお集まりの皆さんは、婦人問題に大変お詳しい方だと、楽屋のほうで伺ったのですが、私は全くの素人ですが、たった1つ私個人の思いで言うことがあるとすれば、若い方たちをできるだけ引っ張り込んでほしいと。そのためには、「明るいあした」「豊かな未来」「安らぎの里」では、絶対誰も付いて来ないよということです。

大変諸先輩を前に偉そうですが、非常にトレンドなドラマを書いている書き手から最後のメッセージとして、送らせていただきます。ありがとうございました。

体験発表及びディスカッション

(コーディネーター) メディアプロデューサー 残 間 里江子
グループ ウィメンズ・プレイス 代表 熊 丸 良 子
IBMワールド・トレード・アジア・コーポレーション秘書業務課長 脊 戸 明 子
脚 本 家 内 館 牧 子

○残間 最初に、パネリストの方たちのプロフィールを、私なりにご紹介したいと思います。

やはり、これからは女の人が、何かものを言うとき、もちろん男もそうですが、若さに対してどういうふうに個人的に思っているかは別にして、歩んできた実人生の年齢というの、きちんと明記したほうが説得力があるのではないかと思いますので、プロフィールを話すときには、年齢もきちんと言うことが私はいいと思っております。その辺から個人が個人、個性というようなことで生きていく、その第一歩になるのではないだろうかと思ったものですから、そうさせていただきます。

内館さんについては先程、ご紹介しましたので、熊丸さんと脊戸さんのプロフィールを申し上げます。脊戸さんは、IBMのワールド・トレード・アジア・コーポレーションの秘書業務課長というのが、いわば社会での職業でございます。そのほかに、後程お話があると思うのですが、青年海外協力隊に参加して、タンザニアなどでも活動していらっしゃいます。さっきも楽屋で皆さんと話していたのですが、本当にいろいろな人、いろいろな人生、いろいろなライフスタイルがあるわけですし、今日の4人もみんなそれぞれ違うライフスタイルで、社会とのかかわり方、また個人としてどう生きているかというようなこと、公私の関係も、バランスが全然違うというのが、改めて言うまでもないのですが、この時代の特徴だと思うのです。社会で何をやっているかというのは、大体プロフィールに書かれてあるわけですが、社会でそういう営みをする、その基盤になっている、あるいはそのバックグラウンドに、どんな個人としての人生や、どんな人間としての哀歓みたいなものをお持ちかという辺りが、他人に話をす

るときには、重要な要素ではないかなと思いますので、その辺の中心にお話を進めていきたいとも思っております。

脊戸さんは独身でいらっしゃいます。この辺も、わざわざ言うことではないではないかとお思いかもしれません

が、大事な要素かもしれません。また熊丸良子さんは、1935年生まれです。私は、いま50代の女の方は、すごくすてきだと思っています。すてきでない人もいるわけで、両極に分かれますが、すてきだと思う女の方がいて、励まされて私たち40代が頑張っている、その代表かなとも思うような熊丸さんです。熊丸さんは、民間の会社で働いていらっしゃって、何となく不文律の慣行があって、結婚退職して、しばらくはいわゆる主婦業、母親業をしていらっしゃいました。その後、横浜の朝日カルチャー・センターで、親子関係の講座の講師などをやっておられます。職業もお持ちで、さらにそれだけではというので、社会活動もなさっている。

男の人に、例えば大統領とか総理に、「あなたは夫として、男として、どういうふうに生きているか」という質問はしないのですが、女が何かをやりますと、母として妻としてという、必ずこの「として」というのがくるので、その辺は熊丸さんもお嫌かもしませんが、通常風に言うと、主婦業も母親業もこなしつつ、職業も途中からもう一度再就職し、さらに社会でも1つ回路をつないでいるという、この辺のお話も伺えるかなと思います。

前提としまして、私はさっきから「世の中は変わっている、変わっている」というふうな話をしているのですが、それは皆さんの中でも実感だと思うのです。社会構造がものすごく変わっているわけです。私たちが、いま生息してい



るこの時代を、俗に構造上は「情報化社会」といっております。欧米では、もう数十年間続いています、日本では十数年間続いているといわれています。通産省辺り、産業の分野では、早くも「情報化社会から、次なる社会は感性・情緒型社会だ」というふうにもう取り決めているというか、変な言い方ですが、「次は情報から情感の時代になる」といっております。

これはどういうことかという、いままでの情報化時代は、新しいとか珍しいとか、「あっちにこれがあるよ」というと、ワァッといくという、情報が軸で人々の動き、あるいは物の売れ方が決まるというような社会だったわけです。

これから先は、個人の感性でものを見る。例えば情報化社会では、ある車を「2万台しか売れません」というと、その2万台を目指して人がワァッと集まるわけですが、これからの社会は、「2万台、買う人は買ってもいいんじゃない、でも私は要らないわ」と。つまり、80年代は私たちは、消費という言葉で物の洗礼を受け、あるいは情報をキャッチして、あるいは女性が社会にいっぱい出て行って体験をして、いろいろなものを見たり聞いたりして、ようやく「私」という軸でものを考えたり、ものを選択し始めたのではないかと。これが望ましい形なわけですが、これからの社会は、その個人の感性でものを見、ものを選択する。あるいは人生を選択していくので、「みんなやっているらしいよ」という塊では、なかなか人を引きつけることはできない。

塊というのは企業もそうですが、何かの運動をしていたりするとき、その運動体のある方向に引っ張ろうと思っても、なかなか一括りにはできない。女という一括りというのも今は昔で、いろいろな女がいるわけです。私は、ホテルのプロデュースなどをもしているのですが、空間も、女の人に来てほしい女受けするホテルを、と事業主は言うわけです。事業主の頭の中の女受けというのは、大体これまでの固定観念で、ピンクと花柄とレースとシャンデリアみたいなものがあるわけですが、もう違いますね。女だからと、ピンクでレースでというのではない。女も十把一絡げにできない。また、世の中全体も、情報というものの嘘と本当みたいなものが、かき分けられるようになった。構造上もこれからは個人というものが前面に出るのではないかと、出なければいけないのではないかと。国際間で見ても、「顔が見えない不気味な日本人」というのが標的

にされていますが、そろそろ私たちも「ウイ・ジャパニーズ（私たち日本人は）」という言い方ではなくて、「I（私は）」ということによっていかなければまずいんじゃないか」ということもあります。

社会構造が変わっていくというのは、ジワジワした所からいろいろなことが変わってきているということです。歴代総理の中で初めて宮沢さんが第123通常国会で、「女の人もこれからは、社会と家庭と両方で、自己実現をしてほしい」ということを施政方針演説の中でおっしゃったのです。これが初めてだということでびっくりしたのですが、でも同時に、私たち女もうかうかしてはいられない時代がやってきたと思いました。

これまでは、政治をやっている人も、あるいは企業のトップも、女の人は何となく家庭の周辺にただよっててもらえばいい、という意識だったのが、この先は、労働力人口も不足するらしい、日本の女の人なかなか子供も産んでくれない。子供も産んでほしいし、労働力としても頼みにせざるを得ないという状況が背景にあって、社会と家庭、両方で自己実現をということになったのでしょう。一見、ものわかりの良い男に变身したようですが、その実どこに本当の狙いがあるのか、というのも懸念すべきことかもしれません。でも、そうは言っても、たぶん女の人に対しては、制度や環境は、お国の事情にせよ、どんどん整うであろう。そのとき、では女の側の意識というのはどうなるのか。ちょうど社会構造の変革、また私たちの意識の変革、とりわけ男の意識の変革で、随分これから先、女性の問題というのも変わってくるのではないかな、という気がしております。

そんなことも踏まえて、まず脊戸さんからいきましょうか。これまでの足跡などを加味しながら、いま思うこと、ご自分の周辺で思っていること、ということに焦点を合わせてお話していただけますか。

○脊戸　ただいまご紹介にあずかりました脊戸明子と申します。なるべく皆さんと交流を図りたいということで、あまり長くお話することを避けまして、私はこんな選択をしたんだ、というところをかいつまんで、サッと通り抜けますので、後でまた皆様からのご質問をお受けしたいと思います。私は年齢35歳のとき

に、青年海外協力隊に応募いたしまして、2年間タンザニアという東アフリカの国で過ごしてまいりました。私の本業は、IBMという会社に勤めており、いま70人ぐらい部下がおります部署の課長をしております。そもそも会社の仕事だけでも十分生活はしていけるわけなのですが、どうして会社以外のことをしようと思ったのかと、この辺りからスタートさせていただきたいと思います。

私は、ちょうど30になりましたときに、揺れ動く女心の時代といいますか、何か人生60年というふうに、自分なりに考えてみたのです。そうすると、ちょうど折り返し点、感慨深いものがありました。「人生相談」というコーナーがよく新聞に載っていますが、あれが私は好きでして、アメリカの人生相談のアン・ランダーズというおばさんが、サンクスギビングという感謝祭の日に、こういう文章を載せていたのです。「朝起きて、耳が聞こえると思ったら、あなたは幸せですね。聞こえる耳を持っているのです。朝起きて、きれいな景色が見えるとしたら、それは幸せですね。あなたは見える目を持っているのです。世の中には、耳が聞こえない人や、目が見えない人がいっぱいいるんですよ。それから、あなたが自由にいろんなことが発言できるとしたら、それは大変幸せな世界にいるんですよ。世の中には、発言ができない国もいっぱいあるんですよ」と、そういう文章だったのです。

感謝祭の日に寄せてですから、いろいろなことに感謝をしなければいけないんですよという文章で、それが大変心に残りました。私はちょっと小柄ですが、体力には自信があるし、結構健康で、大きな病気もしたことがない。これを活かすんだというふうに思いました。身の上相談で感動したというと、会社の人に笑われたのですが、意外に身近なところに、そういうふうに「あっ、これだ」と思うのがあったような気がします。

また、先ほど内館さんもお話していましたが、独身の女性というのは、ちょっと小金があるのです。ですから、やっぱり海外旅行に憧れまして、私もアメリカとかヨーロッパに、休暇をためては出かけて行ったのです。あるとき途上国に行ったわけです。そこで初めて、青年海外協力隊の柔道隊員の男性に出会しまして、「ああ、世界にはこういうような人もいるんだ」と、途上国の人々と

ともに、その国の言葉を使って、生き生きと働き汗水流している若者にすっかり感動しました。アン・ランダーズの話と、そのマレーシアで会った柔道隊員との出会いによって、私はその後の人生を決めたわけです。やはり企業に働いていますと、毎日の生活の繰り返しの中に幅が出てこない。ところが、南国でキラキラ光る汗を見て、私は非常に感動しました。その旅から帰りまして、実際に青年海外協力隊に参加したのは、35歳のときでした。その5年間というのは、やはり親もいましたし、職場の周りの方たちにも、少しずつ理解していただいて、やっと時期が来て、機熟すという形でタンザニアのほうに赴任したわけです。

日本から行きまして、途上国の現実に大変びっくりしました。当時タンザニアは、ケニアとウガンダとの間で戦争をしまして、物資が全然ない。スーパーマーケットに行っても、物が棚の上に全然ない。パン1つを手に入れるにも、炎天下に長い行列をしなければいけない。日本におりますと、水道の蛇口をひねれば、当然のことながら水が出てくるのですが、蛇口をひねっても水は出ない。本当に最初の1ヵ月間ぐらいは、「一体ここで2年間、私は何か活動なんかできるのだろうか」と打ちのめされたような気持ちでした。協力隊からは、「3ヵ月間はじっとしておけ」と言われるのです。無闇やたらに動くと、身体も馴れていませんし、途上国の人々の考え方、価値観もわかりませんので、じっとしておけと言われたわけです。周りを見ていて、「ああ、ここの人たちは、こういうふうなことを考えるんだな」というところから、やっと半年目ぐらいから一歩進んでいくわけです。タンザニアの2年間という時期を過ごして、帰って来てからが、私の本当の意味での「これぞ」という生き方が始まったように思います。協力隊に参加することはきっかけではあったのですが、帰って来てからが、本当のライフワークのテーマを探した、という気がいたします。

いま何をやっているかといいますと、途上国の姿を、やはり私どもの体験したことから正しく伝えたい。途上国の女性たちが、いまどういう状況にいるのか正しく伝えたい。日本が、戦後さまざまな活動なり、試練を乗り越えて、あるいは手をつないでやってきたことが、いままさに途上国の女性たち、もちろん宗教、文化の違いはあるのですが、踏み出して行こうとするときに、伝える

ものがいっぱいあるのではないか、という気がすごくするわけです。途上国の女性の自立というものを助ける意味で、私たちがやってはいけないこと、やっていいことというのは、必ずあると思うのです。やってはいけないことは、やはり最終的な決定権は、途上国の女性たちにある。その間に、例えばいろいろな選択肢を見せて、本当はこっちへ行ってほしいのだけれど、途上国の女性が「こうだ」と言ったら、やはりその手助けをしなければいけない。手を出さなければいけないところと、出してはいけないところがあるということを、非常に深く感じます。

途上国の女性の姿を表すという意味で、代々引き続いて10年間、協力隊員がバングラディッシュの村に入っておりましたので、その中において途上国の女性がどう変化していったか、という意識の変化を今まとめております。ちょうど明日出来上がる予定ですので、ご興味があれば、是非読んでいただきたいと思います。1つは途上国との関連、もう1つは私も企業に働いておりますので、企業の中でボランティアという部分の意識を高めていきたい。いま世の中が変わりつつある中で、企業偏重社会から脱け出すいい時期ではないか、というふうに思っておりまして、企業内のボランティアの高揚という、この2つのことをやっております。

いろいろなボランティアの世界で、女性の方たちとお会いすることがありますが、いちばん大事なことは、やはり興味を持つことです。また、「何かおかしいんじゃないかな」と思う、これが最初の一步のような気がします。長く続けることというのは、大変エネルギーが要るのですが、やはりそこで仲間が増えてきますので、同じ考えの下に、小さなことから始めていく。いまは、情報化社会です。いろいろな国々と本当に簡単にアクセスできますので、可能性としては非常に大きなものがある。そういう中で、これからの女性は、企業だけではなくて、社会との交わりの中に、いろいろな生きる道が選択肢としてあるのではないかと考えております。そういう意味で女性たちが、この世の中で、あるいは日本の社会の中で、変えていく力として大きな存在になっていくように私は感じます。それにつられて男性も変わっていくというようなことを、私は自分自身で、仲間とともにやっていきたいと考えております。簡単ですが、

いま私がどんなことをやっているのか、ということをご紹介させていただきます。

○残間 どうもありがとうございました。異論がある方もいらっしゃるかもしれませんが、日本も一様に豊かさの洗礼を受けて、衣食が足りて、さて本当に礼節というところに行くかどうか。自分たちは一様に潤うことができて、さほど食べるに事欠かなくなったときに、周辺をどういう形で、どういうふうに自分が関係づけていくかというのは、本当に大きな問題だと思うのです。いかにもやりそうな人がやっているといううちは、なかなか運動は広がらないのです。脊戸さんは、IBMという先端の企業に実際にいらっしゃって、そしてボランティアをやっているという辺りの、ある種の意外性みたいなものが、かえって広がっていくきっかけになるかもしれません。またその辺は後で考えます。まず体験ということで、熊丸さんにもお話をさせていただいて、内館さんと4人でディスカッションをして、そして会場の皆さんと交換したいと思います。では、熊丸さん、どうぞお願いいたします。

○熊丸 熊丸でございます。どうぞよろしくお願いいたします。私は、「こうやって生きたいな」というふうに生きてきました。その結果、いま改めて考えてみますと、私の生き方は大体4本の柱から成り立っているように思えます。1つは家事、育児の主婦業です。もう1つは、養護施設の子供たちから「ケーキのおばさん」といわれて23年ぐらいになりますが、月1回友人と2人で160個のケーキを焼いて持って行くボランティアのこと。それから44歳から始めました親子関係の講座の講師、それともう1つは、グループ活動です。最初に、4番目の柱であるグループ活動について、お話させていただきたいと思います。

グループ ウィメンズ・プレイスといいますのは、1984年に横浜市が主催しました「婦人問題海外セミナー」に参加しまして、デンマークとイギリスを訪問した14人がきっかけとなりました。みんな仕事をそれぞれ持っておりますので、比較的時間がやり繰りできる、その中の8人がいま現在グループの活動しております。私たちのグループのテーマは、主に男女平等教育です。そしてモットーは、「できることからやる、できることは何でもやる」というものです。

8年前にイギリスにまいりましたときに、私は感動したことがありました。それは、「機会均等委員会」という所の教育部門を訪問したときでした。その話では、男女不平等というのは、小さいときからの男女不平等教育が非常に大きな要因であると。これは、みんな気がつかないまま、無意識で行われている。とても見えにくい。そういう見えにくいことに取り組んで、これを明らかにして、男女の上下関係が作られないように保育園、幼稚園、小学校、中学校にどんどん働きかけているということでした。いわゆる社会が期待する女らしさ、男らしさの教育、しつけを訂正していくことです。

この社会が期待する、いわゆる女らしさの中身ですが、これをよくよく講座などで検討してみますと、女らしさの中身の20%というのは、素晴らしい人間らしさと一致するのですが、残りの80%といえますのをよく見ますと、成長しないままにいることとか、能力を開発しないままでとどまっているとか、未熟らしさとでも表現できるようなことなのです。つまり、女の子は美しく、白馬にまたがった王子様が現れて、幸せにしてくれるのを待つ、というのが女らしい、そういう感じです。そういう意味で、小さいときに出会う童話とか絵本とかが、とても重要なものになってくるわけですが、私たちはイギリスで、待っているだけの女の子ではなくて、自分で人生を切り開いて、選んでとっていくという女の子を主人公にした『アリーテ姫の冒険』という童話を買ってまいりました。そして、すぐに翻訳して出版したいと思いました。8年前ですが、翻訳したものを持って、あちこち出版社を回りましたが、未だ日本では「賢い女の子の話なんて」ということで、どこからも断われました。最終的には「しょうがないから、自費出版でもしましょうか」と言っているときに、ちょうど6年経っていましたが、横浜女性フォーラムの支援を得まして、学陽書房から出版することができました。

幸いなことに、1990年に「天声人語」にも取り上げられ、子供たちだけではなくて、20代から50代までの女性から、「感動した」「励まされた」という葉書を、非常にたくさんいただきました。今度、私たちは小学生ではなく、もっと小さな、保育園、幼稚園の子供たちにも、この勇敢で賢くて、やさしいアリーテ姫を知ってもらって、親しんでもらいたいと思ひまして、原画を

1 m×1.5 mの大きな大きなアップリケにした布の大型絵本を作りました。そして、これを全国で巡回展をしたいと企画しております。ここにその一部を持ってきておりますので、ご覧いただきたいと思います。

まず、これが表紙です。アリーテ姫が、宝石の大好きな王様によって、悪い魔法使いの所に宝石と引き換えに無理やりに結婚させられます。困ったアリーテ姫が、ワイゼルおばさんから3つの願いがかなえられる魔法の指輪をもらいます。悪い魔法使いは、3つの難題をアリーテ姫に出すのです。できなければ生命をとると。そのときにアリーテ姫は、料理人のアンブルさんや、動物や植物の援助を得て、武力でなく、自分の力で平和的に解決していく、というストーリーです。もらった魔法の指輪、3つの願いはどうなったかということについては、どうぞ絵本を読んでくださいますように。

これを今度は写真に撮り、絵本にして、出版する予定になっております。どうぞ、この『アリーテ姫の冒険』、この絵本と、中学、高校、大学生向けには日本語注釈付の英語版も出しましたので、男女平等の視点に立ちました、この童話や絵本を、全国で副読本に使っていただきたいと、心から願っております。

○残間 お2人のお話を伺っていても、それぞれのやり方、それぞれの方法論で、それぞれご自身の思いを遂げておられる、また遂げる途上にいらっしゃるということが、おわかりいただけたと思います。世の中が変わったというのは、それぞれ1人ひとりの幸福観が変わってきているということにもなると思うのです。女の人生は一本道、女の幸せは結婚とその延長線上の出産にある、というふうに思われてきたのが、人生50年代の1つのライフスタイルというか、ライフサイクルでしたが、女性の寿命が81.81歳になってみると、恋愛、結婚、出産、育児などということは、ほぼ前半の40年で終わってしまって、さてもう1回、40歳代の半ばぐらいの、人生の第2章をどう送るかということも、また1つ問題になってきていると思います。

私の体験ですが、あるテレビ局が、ある1日をルポしたいということで、私の日常をスケッチされました。社会からは、ただ走り回って、ただ寝ないで頑張っている、そういう側面しか見てもらえない。「そんなあなたにも、個人生活はあるでしょう」というわけです。

私は、私的には1児の母でございます。39歳という高齢者出産を乗り越えて産みましたので、間もなく3歳の子供の母親で、シングルマザーでございます。私は、ずっと自分の人生を平凡だと思い込んでいたのです。しかし、友達が、そうでもないではないかと言うので、「そうでもないのかな」と最近思うのですが。ずっと伊藤野枝のように生きたいとか、平塚雷鳥もいいと言っていて、ああいう人の足元に一步でも近づけたらと言っていたのですが、「結構あなたの生き方も過激よ」などと言われるようになっておりました。こういう今の時代、変わっていると言われる中でも、子供を抱えた母子家庭というのは、特に未婚というのは、はっきり言いまして暮らし辛いです。

私は、お金はないことはありません。友人にも恵まれています。それでも結構暮らしにくいから、もっと本当に暮らしにくい状況の人が、いっぱいいるのだらうなと思います。システムも整っていないのですが、その手前の意識の変化が、いろいろなところがそうですが、意識とシステムが、うまく運動していませんので、そういう狭間に立ちますと、強気で生きているように見える私でも、日常の中でたじろぐことがしばしばです。私の母親は、私が物心がついて見た後ろ姿は、いつも新聞のスクラップをしている姿でした。明日の米価のお米がなくなっても、もっと私たちよりも大変な人があるという思いの中で、あまり言葉としては好きではありませんが、いわゆる弱者のため、子供にすれば「うちも弱者だよ、おっかさん」と言いたかったのですが、うちよりもっと大変な人のための社会運動に明け暮れているような母でした。

非常にリベラルで、いろいろな運動をした母ですが、その母でさえもが、私がシングルマザーになると言ったときは、ものすごくたじろぎました。「お母さん、あなたのやっていたことと矛盾するではないか」と詰め寄ったのですが、やはりその母のたじろぎみたいなのが、いま世の中に横たわっている見えない幕といいますか、差別という言葉もあまり使いたくないのですが、でも「そうかもしれないなあ」というのが実感です。日常は、とにかく働いています。いずれ寝たきりになるならば、生きている間は起きたきりでいよう、動ける間は起きたきりでいよう、というのが私のモットーです。子供は、区立の保育園に入れています。突然40ぐらいで子供を持ったというのが、最近はわりと流

行ですが、そういう文化人の女性の中にも、急に子供を持って狂喜乱舞して、突然意識が変わる。つまり、子供を1人持ったぐらいで、人生の真理を知った、というふうに狂喜乱舞する人が結構いるものですから、ああいう仲間には入りたくない、ごく普通にしていきたいと思います、区立の保育園に入れています。そういう所で、声なき声を出したい人の代表になる、というほどおこがましくはありませんが、見ておいてもいい風景かな、というふうに思っています。

朝9時から5時まで保育園へ入れまして、37℃ぐらい熱があると帰されてきます。そういうときは大変ですが、とりあえず帰されることがないことを祈るわけです。そして、手を離れた瞬間からは、「もう仕様がな、何か事故が起きれば、私がいたとしても起きたというふうに思う、神様よろしく」ということで家を出ます。会社に出ますと、帰るのは午後10時です。10時半ごろに走って帰ることもよくあります。こういう私にも負い目がありまして、子供は自分の手で育てなければいけないのではないか、という女性神話というようなものがあります。最初は、人に頼むのが8時まででした。そうすると、7時59分に走って帰る日が続きました。次に9時にしました。そうすると、8時59分に走って帰らなければいけない。仕様がなくて、半年目に10時にやっとう割り切りました。出張も当然あります。いまは4人の人が交替で見えています。

いろいろな不測の事態があります。名古屋にいて、急にベビーシッターさんから「熱があります」と言ってこられても、帰る間にどうにかなっているでしょうから、「善処ください」と政治家のような発言をして、その場をかわしています。時々女性の集まりに行くと、「そんなふうになっていると、あなたのうちの子は、間違いなく不良になる」というふうに言うおばさんたちがいます。

そういう社会慣習とか、いわゆる負い目と闘うというのが、私の中のいま大きなテーマです。「いいじゃないか、私の人生は私なんだ。子供はひょっとして不良になるかもしれないし、暴走族になるかもしれないし、はたまた聖者のようになるかもしれないが、それはその子だ」というふうに思おうと思っても、名指しで「うちの子はものすごくいい子ですけど、お宅の子は絶対に不良になります」と断言されますと、結構ゆらっと揺れて、帰りの新幹線で「そ

うかな」と、窓辺の景色を見ながら「不良になるかもしれない」とつぶやいたりもします。

しばしば、女の人はこういう論議になると、壇上と壇の下みたいな論議になるのですが、私の周りでも大体同じです。宮沢総理は、「社会と家庭の自己実現を」などというふうにおっしゃってくださいますが、内なる、見えざる負い目と闘うということが、結構重要なテーマにもなっています。ですから、環境や制度が差別というものをどうしていくかというほかに、もう1つ自分の中の女というもの、女というよりも女性の性、自ら内なる自分の性というものと、どういう形で折り合いをつけたり、ふっ切ったりというのが、次なるテーマであるわけです。

長きにわたって持たなかった子供を持ってみると、初めて持ったときに、いろいろな人たちが、「やっと一人前になったね」と言ったのです。「ということは、私はこれまではそうじゃなかったんだな」と、年もとっていますから素直には受け取らないで、ひがみに受け取って「そうか、ずっとそう思っていたんだな」と思ったわけです。やはり、持ちたくても持てない人とか、得たくても得られなかった人というのを考えると、森進一や五木ひろしのように狂喜乱舞していられないだろうと思います。私は「あなたたちは人の憂いを歌っている歌手なんだから、子供の1人、2人で狂喜乱舞して、幸せここにありみたいに言わないでほしい」と言ったこともあるのですが、私だけはせめて社会ではハードボイルドに生きたいと思いつつ、家に帰って来ると、「やっぱりこの子、不良になるのかしら」と思ってしまうという。大体、私のいまの日常はそんなところです。

いわゆる結婚とか出産というのが、必ずしも女の人の幸せの指標ではないですね。びっくりするのですが、今年25歳から29歳までの女の人の未婚率が過半数を超えたのです。昔は25歳というと、鳥の足跡とかと言われましたが、もう結婚している人のほうが少ないのです。内館さんは、独身でいるということに、全然こだわりはありませんか。

○内館　　ないですね。実は、最近すごく面白いことがあったのです。この6月13日に『おばさんなんて呼ばないで』というスペシャルドラマをNHKでやるので

す。これは、21歳の子が22歳になる怖さなのです。老いといっても、80歳になる、90歳になる怖さではない。それに対して、ある大きな新聞社から取材の依頼があったのです。私はドラマの宣伝になるならばと思ひまして、延べ2日間にわたり、写真撮影も含めて誠心誠意6時間、いままでのことをお話ししたのです。そうしましたら、途中からちょっとおかしいな気がついたのです。つまり、記者も女性だったのですが、誘導尋問なのです。「もう子供、ギリギリだから、産みたいと焦るでしょう。結婚したいと思いませんか。淋しいはずですよ、淋しくないですか。電気1人でつけるのって、すごく辛いでしょ」と。私は全然辛くないのです。1人で焼肉ができてしまう人なんです。

だから「いやあ、あんまり辛くないですね。子供はいまちょっと考えられませんか」と。NHKの朝のドラマで8,000枚の原稿を抱えていて、子供のことどころか、今は目先のことで精一杯ですよ。

何かおかしい記事にされそうな予感がして危ないなと思っていたら、案の定、書かれました。つまり、ハイミスは淋しくて辛くて切なくて暗くて。子供のいない主婦は、もう欲しくて欲しくてしょうがない。総合職の女たちは、ノイローゼになって辞めるのが当然でという、そういう1つのパターンを作り上げている。そう書くと安心なのですね。でも、そこにはめようというのがありありと見えていて嫌でした。私自身のことで言うと、いまの暮らしが非常に心地いいわけです。子供とか仕事とかと、具体的なことを考えるよりも、取りあえずいまの暮らしというのが、非常に心地よくて元気でいられる。だから、もしかしたらこの先、結婚はあるかもしれませんが、誰でもいいからおすがりして、結婚していただくという気はないし、とにかく1、2年のうちに子供を産もう、という気もいまのところはないですね。

○残問 脊戸さんは、すごくうなずいていましたけれど、何かありますか。

○脊戸 私自身は、ある意味で子供は大好きなのです。自分の年齢を考えますと、もうちょっと無理でございます。医学は発達しておりますが、体力的に自信がない。私は、子供の顔が見たさに乳児院にボランティアに出かけまして、これがまたすごく楽しいのです。そのボランティアの仕事をしていたときに、たまたま写真を撮られまして、会社で有名になりました。「脊戸さんのいちばん輝く

顔」なんて言われたのです。それは自分が選択したものですし、当然のことながら、男性を拒絶しているわけではないのですし、いまの仕事の中でも、仕事以外のいろいろなことの中にも、すてきな男性はいっぱいますし、結婚という形はとっておりませんけれども、淋しくて淋しくて、切なくてという気持ちは全然ありません。ある意味で、自分はいま大変さわやかに、気持ちよく暮らしておりますので、この状態が最高ではないかなと思っております。

○残間　本当に、これがちょっと前までは強がりに聞こえたりすることが、なきにしもあらずだったのです。それが全然そうではないというのは、私たちはわかりますが、結構、マスコミの取材に来る女の人たちなどが、まだそういう意識で、最初から予定調和的に記事をまとめるなどというのが、怖いことはありますね。

○内館　いちばん怖かったのは、男の上司の人が、「いや、ハイミスがそんな元気なわけがない、そうに決まっている」と言ったというのです。それで彼女が私に、誘導尋問した。

○残間　これまで例えば女と男とか、婦人問題などという周辺では、女は被害者、男は加害者という構造で語られるということが基本線にありましたね。内館さんが世の中に出てきたときに、被害者意識ではなく、「13年間のOL生活でした」みたいに、ずっと入ってきたという感じに見えて、珍しいなと思ったのです。前は、独身でいるということに、自分で理由づけが必要だったのです。その辺、「ああ、時代がまさに変わったな」と、内館さんの出現でそう思いましたね。熊丸さんの場合、あれだけのことをしている、女として妻として母として、「として」うまくいっているという、大体「ご主人が理解があるんでしょう」という話があるでしょう。理解がある夫を得たのは、私の才能だ、とはなかなか言えない。本当にそうでしょう。理解のない男しか得られなかった人は、それはその人の才能がないわけですけど、なかなかそういうふうにはならなくて、それだけのことをやっていたら、ご主人の理解があるからだ、ということがありませんか。

○熊丸　ありますね。

○残間　どうしてもありますね。そのときに、「そうよ、私はそういう男をちゃんと

見つけたのよ」とは、なかなか言えないでしょう。やっぱり「主人には協力してもらって」みたいに、一応言うでしょう。家庭の中はどうでしたか。私は、専業とか兼業というのは、農家の人とは違うのだから、主婦にそういうのは嫌だなと思うのですが、でも専業主婦時代が割に長くて、一応そこではコンマを打って、1つの収穫を得て、それで次にいったのですか。その辺の移動の仕方はどうだったのですか。

○熊丸 昭和35年に結婚して、もう33年になります。いま子供は27歳と29歳です。結婚当時は、日本全部がそうでしたけれど、非常に給料が少なく大変でしたね。主婦専業といっても、いまの若い人たちを見ていると、全然違いますね。食べるものも手作りでケーキやお菓子を作る。洋裁は私は駄目だから、服は絶対に作らないといって結婚しましたが、結局買えないものですから、子供たちには夫のYシャツの古いのとか、端切れを買ってきたり、私のセーターを上下にするとかいう形で、全部縫って、小学校6年生までは着せました。中学に入ってから、大人物のバーゲンで間に合わせるという、そういうことをしていました。それはそれなりによかったです、やはり転勤があって、大阪から東京に来ましたときなど、上が2歳半、下が半年でして、誰も頼る人もいない。育児時代は、ほんの3分間も自分だけの時間はとれないのです。そういう時、永久にこういうのが続く、という錯覚に陥ることがあるのです。そのときは涙がこぼれました。

それまでも家庭教師とか、ボランティアとか、そういうことはずうっとやっていました。子供を私立の中学に入れたのです。あとは放っておいても自分でやっていこう、私はそれで何とか解放されて、自分のことだけを考えてもいいだろう、という感じになりました。そのとき、さて何をしようかと思ったのです。再就職も、教職課程はとっていましたが、もう年齢オーバーで、どこも雇ってくれそうな所はない。家事、育児と両立して、夫と同じフルタイムの仕事に就く自信も全くないということがありまして、それならどうしようかと考えたわけです。ちょうど子供が反抗期で悩んでいたことも幸いしまして、それに英文科を出ていたこと、また友達と読書会なども続けていましたから、英語も忘れていなかったという、この2つを合体させまして、どっぶり子供にか

かわった経験を活かして、親子問題関係の仕事をしようと思ったわけです。

その当時、登校拒否とかいう問題がどんどん起こっていました。子育てというのは、ある意味では大変なんです。当時は、女は子供の犠牲になるのが美德で、たとえば子供がちょっとでも登校拒否などをすると、全部母親のせいだと、それが一般社会でいわれていたことでした。偉い評論家の方々も、みんなそういうふうな、母親切り捨てです。私もいろいろ本を読んだりしましたが、それに非常に怒り心頭に発しました。たまたま親子関係の講座というのが、とてもすっきりした心理学を基にしたものでした。このP. E. T.というのが、当時まだ日本にはなくて、アメリカでやっていたのですが、その本をたまたま読んで、これなら私にも出来そうだと思って、早速作者に手紙を書いたのです。日本で始めたいのなら、一度来いと言われたのです。当時は、家を空けるのは10日ぐらいが限度でしたから、ロスアンゼルスで1週間缶詰になって資格をとって帰って来ました。それから必死で講座を始めたのです。そのときは、いままでの鬱積が爆発したという感じですね。

○残間 火つけのエネルギーになったわけですね。

○熊丸 そうです。夫は特別理解があったわけではなくて、ただ「これを今受け入れなければヤバイぞ」と思わせるような、迫力がこっちにありましたから、やむを得ず理解ある夫になったような感じです。

○残間 迫力というのは、大きいですね。時代が変わっているというのは、別に気分ではないのですね。例えば一昨年から去年にかけて、日本の家族数というのが、非常に激減しているわけです。一昨年までは、たしか39.8%ぐらいが全世帯数で、家族というカテゴリーだったのが、去年は25.5%、14ポイントも下がった。代わって単身者などが増えてきているわけです。また、これはバブルの影響もあったのではないかといわれているのですが、去年は離婚率が史上3番目でした。それまではずっと横這いだったのです。特に50代、結婚15年以上、20年以上の離婚が多い。また結婚1年以内、「こいつとずっといても仕方がないな」と、最初に離婚をチラッと頭に思い描いたのは、新婚旅行中の不甲斐ない男の態度を見て決めたという、通称成田離婚と、この離婚が率としては10年前の2倍以上になってきている。ですから、結婚というのも、

決して人生の終着駅に行くための船ではなくなっているというのは、統計の数字もそうになっています。

また、海外旅行に行っている人は34歳までの女の人で最近では4.4回だそうです。男は3分の1以下です。それが成田離婚にもつながっているかもしれませんね。余談ですが、海外旅行というのは場数なので、英語ができるとかという以前の問題で、どこでチップを払うかなどというのは、場数らしいです。新婚旅行が初めての海外旅行のケースが、これまでの男の人には多かった。時差というのも、肉体的には男のほうが女の倍ぐらいひびくということで、大体本領を発揮できない海外に見栄を張って行ったために、1年以内に離婚されてしまうということのようです。

婦人問題などをとらえるときに、世代的な格差なのか、年代的なのか、意識の格差なのかかわからないのですが、いま女の子は非常に元気だといわれていて、アッシー君だのミッグ君だのと言っているといわれていますが、その辺は内館さんに聞きたいところです。とりあえず、少なくとも適齢期ということかというと、女のほうが男の2分の1、つまり男が2倍強になりました。どれを適齢期というのかわかりませんが、でも5年ぐらい前から、毎年5万人ぐらいずつ男は積み残しがあるといわれているので、女の人には選択の幅がかなり広い。それを、さらに結婚したくないという未婚率が高いわけですから。「するなら同世代だと余程いい人じゃなければね、そんなにしてまで自分のいまの自由やお金を、男にとられるのは嫌だ」というのが増えるのも当たり前ですが、その辺の若者の動向というのは、内館さんはどう思われますか。女の子は非常に元気で、もう選りどり見どりで、というふうにはマスコミなどはいっていますね。

○内館　月刊誌で「恋愛レッスン」というエッセイを毎月書いているのですが、私は自分の頭の鈍さは追えないのですが、人のことはすごくビシビシ書いてしまうのです。友達が「自分のことはおいといて、よくやるわね」と言うのですが。それに毎月すごくたくさん女の子たちから手紙がくるのです。それを見ていると、やっぱり、いたいけなまでに男の人の目線1つに震えているというのがあるのです。いろいろなアンケートなども月刊誌のほうから送られてきて見ますけれども、基本的にはやはり結婚に関しては、女の方は男の人にイニシアティブを

とってほしいと思っている。ところが『ホットドッグプレス』とか『ポパイ』とか、ああいう雑誌の編集者と会々と、男の人が女の人を扱いかねているというのです。ただ1つ怖いと思うのは、非常にたくさん情報がありますから、その中で女も男もがんじがらめになっている。つまり女はこういう男が好きに違いない、と男は思い込んでいる。女のほうも、男が好きなのはサラサラの髪で色が白くて、唇が赤くて細くてみたいな、それを自分に当てはめてみると、はまらないわけです。そうすると、「ヤバイな、私がないのって当然だわ」となって暗くなる。そういうように、がんじがらめになっている部分がすごくあると思うのです。かわいそうだなと思います。

○残間 戦後生まれがもう60%を超えたという、こういう人口の構造でいいますと、1つの問題を同じステージで、同じ場所に立って論じるのは難しいかもしれませんが、折角のこういう機会ですので、会場の方ともディスカッションを少ししてみたいと思います。

○質問者1 私の娘はいま中学1年生なのです。いま内館さんが最後におっしゃったことで、いまの女の子の特徴がすごくつかまれていると思うのですが、どういうふうにして、どういうふうにしてと、本を読んでも何をしても、やはり決めつけているのです。そして、それに当てはまらないと駄目じゃないか、というのがすごく強いのです。親としては、そんなのは違うんだよというふうにわからせたいと思うのですが、どういうふうにしていったらいいかなと思うのですが。

○残間 難しいですね。でも、確かに80年代の消費という2文字は、物を買わせるための手立てですから、いっぱい引出しを作らなければいけなかったのです。サラサラの髪にするには朝シャンがということで、シャンプーも売れるし、朝シャン台も売れると、こういういかにして物を買わせるかという構造で、80年代は成り立っている。いまは、ちょっと踊り場ですね。身体は1つだし、筆筒の容量は決まっているわというのが今で、これが感性化社会にいけるかどうかの瀬戸際です。これは慰めにはならないかもしれませんが、多分時代の風潮で、「身体は1つで、どう逆立ちしたって、あなたの髪の毛はその髪の毛よ」みたいなのが突きつけられる、ということがあるのではないのでしょうか。

○内館 私は、いまのお母さんの気持ちはすごくよくわかるのです。ですからドラマで私は「あなたはもしかしたら、もてない女の子の、あるいは男の子の型にパターンがはまっているかもしれないけれど、そうじゃないのよ」というのを、具体的に見せたいと思うのです。私は、やはり世の中でいちばん切ないのは、オール3じゃないかという気がするわけです。私はさっき120kg、185cmが好きだと言ったけれど、それは周囲を圧倒するじゃないですか。これは、やはり男の色気です。だから、何か1つ突出して、具体的に出来ることがあると、すごく違うんじゃないかという気がするのです。サラサラ髪の毛じゃなくても、ものすごく走るのが速いとか。余談になりますが、私は『千代の富士物語』というのを書いたのですが、これをお引受けした理由は1つだったのです。つまり千代の富士のご両親にお会いしたら、「息子は勉強は嫌いだった。だけど運動は抜群だった。だから、勉強なくていいから運動をやれと言った」と言われたのです。「これはすごくいい話だ」と思いましたね。そういうのって、自信になるという気がしますけれど。

○残間 すべての問題は教育というところになってしまうのです。偏差値というものの善し悪しを含めてですが、やっぱりオール3は嫌で、オール5を目指してみんながきていましたね。個性というものがないでしょう。私たちが小さい頃は、主要5科目は出来ないけれど、技術・家庭科の時間だけはすごく輝いている鼻をたらしした子供がいて、長じて町一番の大工さんになった、というのがあったのです。いまは、そういうストーリーがつながっていかないという時代、教育の弊害として出てきている。個性、個性と言うけれど、個性のある人を生きにくくさせている。異端の人とか、異人とかをちゃんと内包するというか、抱え持つぐらいの興行きのある社会になっていなかった。これからは、サラサラじゃなくて、庭ホウキみたいな、シュロみたいな髪の毛もいいよ、と言う人もいるかもしれない、というふうにいかなければいけないのですけれど、やっぱり異形とか異端とか、異人、奇人というものを、この国は認めなくなってしまったというところが、右へならえのもてないカテゴリーではないかと思うのです。熊丸さんなども、そういう時を経て来られたのでしょうか。

○熊丸 経て来ました。ここで、親子関係講座の講師みたいな言葉になるのですが、

親としては子供が、あっちに一生懸命になると心配になるし、こっちに一生懸命になると又心配になる、というところが大いにあると思います。そういう親自身を、まず「それでいいんじゃないか」と思うようにする。それがいいお母様だということ。お子さんが、何かに夢中になっていることは素晴らしいことです。そういうものをどんどん経た上で、自分がどういう個性を持ち、将来どうするというところに、やっと到達できるわけです。だから、お母さんもお子さんもとて面白いプロセスにいらっしやると、私には思えます。

○残間 育戸さんの場合、IBMというと、絵に描いたようなキャリアウーマンが、いそうな外資系の会社ということで、憧れている人もいると思いますが、あいう所に働いている若い女性の意識はどうですか。

○育戸 先ほどもお話に出ているように、情報化社会ですから、その情報に自分が埋没してしまうと、やはり力が出ない。情報をうまく自分で利用していくところが、1つのキーじゃないかなというふうに思います。職場のことをいいますと、私の部は女性の平均年齢が29.7、30に近いのですが、彼女たちの生き方を見ていますと、ちょうど私が、同じところに迷ったように節目時かなと思っています。褒めてあげるということを、私は自分に言い聞かせているのです。人には、それぞれ能力というか持ち味があって、その持ち味がみんな同じでは、1つの仕事をしてもらう上で困るわけです。違うものがいっぱいあるほうが、バイタリティというか、エネルギーになっていく。その意味では、いろいろな多様性を持っているほうが、企業にとっても強いし、私の組織にとっても強いというところで、その人の持ち味を褒めて伸ばしてあげる、ということが大事だと思います。

その人が持っている内在的な能力、ピカピカッと光る1つに、またほかの者が引きずられていくのです。そうすると、1つのまとまりとして、大変大きな力になっていく、ということをしごく思うのです。職場では、親会社から派遣されたアメリカ人をはじめ、いろいろな国の方と一緒に仕事をしております。彼らの人の使い方というのは、大変上手だなと、いつも感心して、いい所は学ぼうという気持ちでやっております。

○残間 ほかにございませんか。

○質問者2 私は30代の半ばで、一度離婚しまして、4年前に再婚して、子供が5人になっております。昨年、再婚相手の家に5人プラス親で7人が加わりまして、いま10人の家族で住んでおります。母がいろいろと話を聞いてくれますので、かなりこのごろは、写真を見ても顔はくつろいでいるのですが、私のいまの疑問といいますのは、専業主婦といいますか、アルバイトをしていますので、子供のことは私はすごくわかるのですが、普段家にいない夫が、私の言うことよりも、自分の見た目を通してしか信用しないのです。彼の望むものは、私の笑顔だと言うのですが、こういう状態では私は笑顔がないのです。どうも理解がいかなくて、なぜだろう、なぜだろうという思いで毎日暮らしておりますが、その辺はどうなのでしょう。

○残問 かなり個人的な問題で、その夫を見てみないとわかりませんね。

○質問者2 いろいろと女性が考えて、自分の仕事を選んだり、家庭に入ったり、いろいろなことをやっておりますね。私も社会に出て働いた経験もありますが、大事なことは、男の人が自分の考えを中心に、やられていることが多いように、うちを見ても外を見ても思いますので、その辺りの理解の違いが、なかなかできないという思いであります。かなり個人的になってしまい済みません。

○残問 いまの話の中で、いくつか示唆を含んでいるものがあると思います。しかし、それは身も蓋もないようですけど、やはりその夫と、家中の心身ともの武器を振りかざして闘うしかない、それしかないんですよね。熊丸さんのご主人は理解があったかどうか知りませんが、そういう人ばかりではなくて、やはりドアの内側での闘いを見せないで、笑顔に変えて外に出てきている女の人というのは多いと思う。私がさっき言った負い目というのが、自分の中にありますでしょう。やらないで済んだらどんなに気が楽か。「私嫌いな」とか、「こんなにたくさんの家族の面倒を見るのは嫌なの」と言えたら、どんなに楽かと思えるのに、言えない自分というのをちょっと分析してみなければいけない、というのもあるかもしれないですね。

いま、一度離婚して再婚したと言われましたが、再婚率もすごく上昇しています。昔は、男が再婚で、女が初婚でしたけれど、いまは違うのです。いまは、女が子連れ再婚が多い。再婚同士がもちろんいちばん多いのですが、この辺も

生き生きしていいですね。お宅の場合は複合家族ですけど、アメリカへ行くと3人前の妻の子供と、いまの何とかが一緒に暮らしている、というのも普通になってきている。意識の統一は非常に難しいでしょうけれど。

○質問者2 1年、2年、3年と、身体が馴染んできて、頭が大きく膨らんでいたのが、だんだん自分がやってみるということが自然になってくるのです。ですから、いろいろお話を伺っていて、自分が思ったことを行動しないで、考えてばかりいては何も変わらないんだな、というのがわかってきたような気がします。そうやっている間に年をとってしまうのかな、とも思うのですけれど。

○残間 内館さんはどう思われますか。

○内館 ご主人は、結局「君の笑顔が僕の高貴のご馳走だ」とおっしゃるわけでしょう。「でも、私はそんなに笑顔ばかり見せていられない」というお気持ちが、あなたの中にあるわけでしょう。

○質問者2 はい。でも、見せちゃうのです。

○内館 見せちゃえるのだったら、見せてしまったほうがいいと思うのです。ちょっと話は違いますが、前は1人の男の人と一生懸命付き合うのが、それが潔い行為であって、2番手、3番手なんかキープするなど、よく私は偉そうに言っていたのですが、最近は1番手と辛い目に遭ったときに、ちょっとキープとご飯を食べると楽になるというのがあるのです。だから、例えばご主人にニコッと笑顔を一応見せておいて、その笑顔を見せるために自分が楽になる方法を考える。何も、別の男の人と付き合うという意味ではなくて、何か別の暮らしを1つ持っていればいいと思うのです。お稽古事でもいいし、女友達とご飯を食べに行く会を、週に1回とか、10日に1回持つとかでもいい。そういうことがあると、ニコッとしながらも、「よし、次はフランス料理だ」とかって思えてしまうと、元気になれるという気がします。

○質問者2 細々とそういうことをやっていますので、それで何となく自信がついたような気がします。

○内館 頑張ってください。

○残間 人は、みんなきっかけが必要なので、きっと今日しゃべったことがきっかけになって、ふっ切れるのではないかと思います。「仕事だと思って笑えばいい

んですよ」というのも、1つの業としてあるのです。洗濯したり、掃除をするのが業ではなくて、相手が笑顔がほしい、ゴミが散らかっていても笑顔のほうがいいと言うのなら、ゴミを散らかして、徹底して笑っていることも大事だし。バーゲンに行くと、一応これをとっておくけれど、もっといいのが見つかったら、それはポンと捨てますね。それを最低保障の保険男といい、別名キープ君というのですが、そういうのも、男の人というのではなくて、気持ちをちょっと変えると、軸を変えてみるというのはいいいことだし、それでなかったら3回目の結婚にチャレンジというか、それを捨てる方向もいいですね。

○内館　2回もめぐり会っているのですもの、いいですよ。私と脊戸さんは、1回もめぐり会ってないものね。

○残間　私も子連れ再婚先を探していますが、なかなかないですよ。そういう、いろいろな人がいます。婦人週間で婦人問題というと、女の話みたいに使われがちですが、今日は男性もいっぱい来ておられます。役回りで仕様がなくて来ておられる人もいるのですが、いつも問題なのは、ここに来ていない人なのです。来ている女の人は、そういう意識を多少なりとも持っていらっしゃる。あるいは、その隣にいる男の人が問題になるわけで、是非お帰りになったら、今日の話などは、面白いおかしく、砂糖菓子のおブラートにくるんで、夫とか息子とか愛人とかに言ってほしいと思います。男の意識も、だいぶ変わってきていると思いませんか。さっき言いました宮沢総理が、やはり女の人も社会と家庭と、両方の軸を持ちましょうね、場面を持ちましょうねと言ったというのは、これはさっきちょっとうがった言い方で、お国の事情もあるのではないかと、労働力が足りないとか、そんなのもあるのではないかとはいいましたが、もっと身近なところで、日本の男性の意識もすごく変わっています。

妻に働いてほしいという人が、もう7割を超えています。面白いのは、「でも」という本音が、この辺りにあるのです。自分より早く帰って来て、自分より収入がちょっと少ないほうがいい。ちょっとです。でも、可処分所得が多いほうが、ゴルフの回数とお小遣いが多い。背広の枚数も、妻が働いている家の人のほうが多いということですから、男の人、特に30代、40代、50代の前半では、できれば妻にも働いてほしいという人がいます。—去年の統計です

が、17%ぐらいの人は、家事、育児を手伝ってでも、妻に働いてほしいと言っています。男の考える家事ですが、開けてびっくりです。換気扇の掃除、新聞とり、靴みがき、ゴミの処理、ゴミを持っていくということです。これだけだと1時間で終わる家事ですが、でも意識としては、男の人たちも変わっている。国も企業も変わっている。

さて、ではこういうところに立って、女のほうは、結構辛いです。誰かのせいにできない。「主人が駄目と言うから」「私は本当は××をやりたいんだけど、主人が駄目と言うから」という言い訳も、ちょっと聞きにくいですね。「私は子供が3人いて、あなたは1人だから」と言う。別に頼んで3人産んでもらったわけではない、自分が産みたかったんでしょうと言われてしまう。つまり、情報化の時代を経たということは、いろいろな人生があるよという情報もきたし、あるいは男の人たちも、「なるほど、いろんな女がいるんだな」と。パートも入れれば、2千数百万人の女の人が世の中に出てきている。会議も、委員会もそうです。女の人がだんだん増えてきました。昔は働く女というと、ひっ詰め髪に三角眼鏡みたいな感じでいわれていましたが、いまはそんなことはない。ちょっと社会に回路を持つ、座敷パンダみたいになっていない女のほうがいい。朝から座敷わらしみたいに座敷に座っている女の方は、男から見てもあまり格好よくない。まして世の中は、パートナーの時代などといわれていると、連れて歩いて恥ずかしい妻、連れて歩いて恥ずかしい夫というのは、もう捨てたという感じにもなるわけです。男の意識の変化も、ジワジワですが、情報化の波と一緒にきていますので、「うちは主人の理解がないのでできない」というのは、さっきも言いましたように、「理解のない男しか選べなかったんだろう」と言われますので、女の側の問題として、これから自分の人生の選択肢をどこにとるか、というのは大変重要な時期にきていると思うのです。脊戸さんは、男の人の意識の変化をどう考えられますか。IBMは外資系とはいえ、基本的に男社会といわれた社会の中の中核にあるわけですが、男性の意識の変化などということについて、感じることはありますか。

○脊戸　女性あるいは男性の意識が変わってきたなということを、職場ではあまり感じないのですが。いまボランティア活動を、もっと日本の社会に広めていき

いと考えているので、それは女性だけがやることではなくて、男性も社会にかかわるという意味で、1つの企業偏重の中から、変わってほしいという部分なのです。結婚して、旦那さんがほかの会社に勤めていて、子供ができましたというときに、女性がどうしても犠牲になる。例えば、ちょっと子供が熱があると、保育園は預かりませんので、すぐ帰されてしまいます。そのときに、じゃあ誰が引きとりに行くか。私は必ず、私の所にいる女性の社員に、「せめて3回に1回は、ご主人にも休んでもらってください」と言います。「女性も職場では全く対等の立場ですから、何も女性が常に休まなければいけないということはないじゃないですか」と。「脊戸さん、主人は協力するとは言っているんですけど、休むと周りの人たちから、子供のために休むということで笑われることになるんです」と言われます。「そこが肝心なんです、やってください」ということで、その辺から意識を変えるということを、少しずつですがやっていただく。

1回やると、少し楽になるようで、女性社員のほうも、何かあったときに、3回に1回は旦那に頼めるんだなということで、「お陰様で、最初は大変でしたけれども変わりました」と言われます。先ほどの話ではないですが、ご自分が選んだ男性ですから、是非いい形で討議をしていただいて、やっぱり変わってほしいという気持ちから、そういうことをお願いしています。特に30代辺りからは、男性役割分担、女性役割分担から、だんだん変わってきているかなという感じがします。ですから、いま勇気ある人々が、これが普通の形になるように、これからどんどんそういう核となる部分を広げていきたいな、というふうに思っています。

○残間 熊丸さんのさっきの絵本、みんなで刺繍をしたりして作られたということですが、あれは男の人が入っていないのですか。全部女ですか。

○熊丸 一応、グループのメンバーが、婦人問題で海外セミナーに参加したメンバーでしたから。

○残間 そういうのも、だんだん境界線を外すといいですね。刺繍が好きな男なんて山ほどいますよ。編物なども女よりうまい人もいますので、そういう人を引き込んでいく。女の人運動も、女の人だけでやっているに限界線がどうしてもあ

る。刺繍男などに実演させてやっていくとか、そういうふうにしていくといい。旦那さんの中にも、隠れた才能として、刺繍とかそういうのがないとは言えない。自ら、女の側も女の性というところにとらわれない姿勢が大事かもしれないし、そういうほうが楽しいでしょう、世の中は男と女しかないわけですから。

内館さんは、1人でフリーランスでやっているわけですが、特にマスメディアは男の世界で、お役人などより余程男のほうがディジョンを決める場所にありますので、権力を持っていたりして、わりに古い構造ですね。その辺で、男性の変化とか、逆に女性の変化というのを感じるところはありませんか。

○内館 脚本家という仕事は、個人でやっている仕事なので、どういう企画をどう通そうかという話のときは、全く男も女もないのです。ただ、局サイドでゴーサインを出すという、上のポジションにいる人たちは、もちろん男の人が多いのですけれど。私は企業に勤めていたときには、格差とか、いろいろなことを感じる事があったのですが、フリーランスで、物を書くという仕事をやっている上においては、あまり男女ということでカチッときたことはないのです。

○残間 でも、男の人の意識の変化みたいなものは、このごろ感じることはないですか。

○内館 基本的には、そんなに変わっていないと思いますね。私は家事分担という言葉は好きではないのですが、中には家事分担もいいという人もいるでしょうけれど。『あしたがあるから』というドラマを書いたとき、ヒロインが結婚した後、夫に家事が頼めない、という心理を書いたことがあったのです。

そのときに、たくさんお手紙がきたりしたのですが、男の人の中には、さっきおっしゃったみたいな、子供のために休むと、面子が立たないというのが根強くあるような気がします。それを、どうやって少しずつ、お洒落に変えていくかということじゃないかと思うのです。

○残間 そういうのをやっている人が、小汚いおっさんだと、説得力がないんですね。ものすごく格好いい男が、「済みません、子供のために帰ります」と言うと、「わあっ、いいわね」ということになるけれど。

○内館 だから女の側にも問題があると思うわけです。つまり、女の人たちはかつて「三十路」と呼ばれていたのに今は「トランタン」というぐらいお洒落になってきた。私みたいに「オールドミス」が、いまは「シングル」ですから。その

くらいお洒落になってきたというのも含めて、やはりそういうことを変えていくときに、さあ変えろ、さあ変えろと、ギャンギャン言っているだけでは、これは単なるヒステリーおばさんですよ。ヒステリーおばさんになっちゃうと怖いという気がする、変わるものも変わらない。だから、もうちょっと軽く、お洒落にそういうことができると、すごくいいなど。気がついたら変わっていたみたいなのがいい、というふうに思いますけれど。

○残間 それには、無意識に作るいろんなしづらえがないと、逆にできないですね。放っておくと、そうはなりにくいですね。次のキーワードは、関係ということなんじゃないかと、あちこちで言われています。それは、親子だったり、男女だったり、夫婦だったり。この関係というものがちょっと違ってきて、その新しい関係の中で、新しい秩序や法則が生まれてくるというのが、これからだろうと言われていますが、自分を中心にした関係をどう変えていくかが問題ですね。

今日のお話は、言い放しといえは言い放しでいいわけですが、こういう話を1つに括るのは非常に難しい。でも、少なくとも3人に共通しているのは、やはり自分自らの変化を恐れないというか、変化の波がきたら、波乗りするというのではなくて、自分で変化の波を起こして、それに乗るもよし、乗り損なっても、そこで「自分が作った波だから」という、ある種の潔さみたいなものが感じられたわけですね。世の中の変化の中で自分のとる舵を確立する。もちろん共に共生する瞬間もたくさんあるわけですが、少なくとも私は何をしたいんだという、この「私」というものの再検索作業というのは、とても重要な気がします。

そして、「女と男（ひととひと）……」、「女と男」というところに「ひと」というルビを振らなければいけない悲しさというのが、この時代の残り香という感じがします。別にこれが女と男だろうが、順番が男と女だろうが、いいんじゃないのというふうになればいいのですが、それでも労働省が主催するのに、「女と男」「ひととひと」というルビが打たれるようになったのは、前向きなのかもしれませんが、やがてこのルビがとれても、関係ないようになるのがいちばんいいわけです。「個性で描く未来形」というテーマでお送りしましたが、最後にお1人ずつ、本音をお聞かせください。

- 熊丸 さっきの話に続きますし、アリーテ姫が3つの願い事をどう使ったかということにも関連して、その作者からのメッセージにも関連しますし、私がいちばん言いたいことでもあります。『自分が心の奥底で何を感じているか、どうしたいのか』ということに、しっかり耳を傾けていただいて、それにちゃんと気付いて認識する。それを満足させていく方向がわかればそういう方向でいろいろなことができて、達成していくことができると思います。そして、女の子たちにも、それができるように、「何がしたいか」という心からの声を、女の子だからあしななければ、こうしなければということで潰さないように、是非していただきたいと思います。自分自身の世界を大切にできれば、他人の内にある世界も、とても大切にできると思います。
- 脊戸 私は、タンザニアから日本に帰ってきたときに、街を歩いている人たちが何と無表情なのだろうと、感じました。日本再考というか、これでいいのかなという疑問があったわけです。人生にはいろんな選択があって、それは自分が選んでいくものだと思います。しかし、「選んだ以上は」と、あまり肩肘張らないで、楽しみながら生きられれば、いちばんいいんじゃないかなと思います。
- 残間 そうですね。こういうことでこれを選んだ、というふうに力をこめて言わなくても、自然にそれが「そういう人生もあるでしょう」と言われるようになるのが、いちばんいいわけですね。内館さん、何か一言どうぞ。
- 内館 やはり、何かを始めようとするときに、人間いちばん若いときなんだと思うことと、さっきも申し上げましたように、明るい明日、豊かな未来、素晴らしい親子、理想的なパートナー、これだけじゃ世の中始まらないということです。これをできるだけ具体的に、噛みくだいてセリフにしていくのが、脚本家の仕事であり、多分いま元気で足腰立っている私たちが、世の中にできることは、少しずつ具体的に動いていくことじゃないかと、すごく思います。
- 残間 いま内館さんがおっしゃった若さというのは、別に実年齢の若さじゃなくて、そういう思いを持っているときに、人間は若いということですね。
- 内館 そうということです。
- 残間 本当に81、81歳まで延びてきて、嫌なら捨てればいいですよと簡単なものではないですが、だからといって、あまり自分で線を引いた人生の模様の中

に、自分をギチギチにからめとらないで、長い人生ではあるのですが、1回きりの人生ですので、いつかはわかりませんが、最後にやってくるであろう港で、バランスがとれれば、帳尻合わせができれば、つじつま合わせができればいいか、というゆったりした気持ちと、やはり今始めようみたいなのと、どう結ぶかですね。私も特別な能力も何もなく、ただこうやってやってきて、ここにきているわけです。さっきから13年間のOL生活と言葉に出しながら、あれっと思ったのです。私も13年間結婚していたのです。そして主婦業をやっていました。そこから、また流れ流れて今日にきていて、思えば本当に、どうしてこうなっちゃったんだろう、ということもあるのが人生ですが。でもこうやっている限り、どこかに次のステージや次の役が、内館さんではありませんが、いくつものシーンを持って、いくつもの役を演じられるというのが醍醐味ですね。今日は喜劇でいこう、今日は悲劇でいこう、今日はメロドラマ、あるいは今日は調子が悪いから通行人でいこうとか、何でもいいのですが、やはりたくさんさんのステージを、自分自ら創る。そして演じてみる。いつも主役ばかりも無理だから、脇役もあれば、ちょっと年をとったら味のいいバイプレイヤーになることもできる、というようなのが人生かなと、40を過ぎると思ったりもします。

今日は、ほんの戸端口だけのお話になってしまい、皆さんはもっと言いたかったなというのがあるかもしれません。またどこかで皆さんとお会いすることもあるかと思います。こういう機会を得て、私も新しい出会いがあった。皆さんも、それを新しい出会いにつなげていただければと思います。

私も、日常は小さな会社を経営したりしていますが、なるべく生きた、いろいろな人たちの歩みを自分の胸の中に吸収しつつ、教えていただきながら、できれば一生現役で働いていきたいと考えています。結構、働くというのはすてきなことです。嫌なこともいっぱいありますが、社会とかかわることは、すごくすてきなことだと、呪文のように自分に繰り返し唱えながら歩いています。

またどこかでお目にかかれるのを楽しみにしています。本当にありがとうございました。

VI 閉会あいさつ

労働省婦人局長 松 原 亘 子

本日は皆様方、全国からこんなにも大勢お集りいただきまして、ありがとうございます。最後までご静聴いただきましたことを深く感謝申し上げます。4人の先生方には、非常に示唆に富む魅力的な有意義なお話を伺えたと思っております。今年の婦人週間のテーマは「性にとらわれず いきいきと暮らせる時代を築こう」というものですが、先生方のお話を伺っていると、もうそういう時代がきてしまったのではないかと、一瞬錯覚を覚えたほど、非常に活発に、まさに性にとらわれずいきいきと生きておられる方々でございました。ただ、現実の世界に戻りますと、まだまだ私ども1人ひとりの意識なり、活動なりを積み上げて、こういう時代にできるだけ早く近づかなければいけないということだと思えます。本日のお話が、皆様方の参考になれば、非常に幸いだと思っております。

婦人週間は、お蔭様で今回が44回目でございます。今日の会合についての、皆様方のご意見をたくさんお寄せいただきたいと思いますし、また来年も多くの方々に喜んでいただけるような企画を考えたいと思っておりますので、ご意見をお寄せいただければ、非常にありがたいと思っております。どうも本日は、最後までご静聴ありがとうございました。またよろしくお願い申し上げます。